平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡

―　中京区七丁目町における埋蔵文化財発掘調査　―

2019年

合同会社　アルケス

平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡

―　中京区七丁目町における埋蔵文化財発掘調査　―

2019年

合同会社　アルケス

例　　言

１．本書は京都府京都市中京区東堀川丸太町下る七丁目町５、６－１に所在する平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡（17H679）の報告書である。

２．本調査は、所在地の開発工事計画に伴って行われた試掘調査によって遺構が確認されたため発掘調査が行われた。

３．本調査は、株式会社フジヤの委託を受けた合同会社アルケス（代表社員　持田　透）が実施した。

４．本調査の発掘期間は平成 30 年 8 月 27 日から平成 30 年 10 月 19 日である。

５．本調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言のもと行った。

６．本調査の体制は以下のとおりである。

調 査 主 体：　合同会社アルケス

調　査　員：　持田　透

調査補助員：　谷本　和幸

７．本報告書の執筆は持田が、編集は持田・小池智美が行った。

８．本報告書では以下の地図を調整・編集した。

京都市地形図（１：２５００）「聚楽廻」　京都市都市計画局

９．本報告書で示す座標･方位は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T. P.）に基づく数値である。

10．本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。

11．本報告書に掲載した写真は、遺構を持田、遺物を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。

12．本調査にあたり、以下の方々に助言をいただいた。（敬称略・五十音順）

一瀬和夫（京都橘大学）、鈴木久男（京都産業大学）、辻　純一（株式会社文化財サービス）、中内康司（中内建材店）、西山良平（京都大学大学院）、南　孝雄・吉崎　伸（京都市埋蔵文化財研究所）

13．出土した遺物は、関連する図面、写真とともに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管されている。

凡　例

１．写真図版の縮尺は任意である。

２．報告書に掲載した遺物番号は実測図、観察表、写真図版にそれぞれ対応している。

３．本報告書で使用した土色は、以下を使用した。

『新版　標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局監修

４．出土した遺物の年代は、以下を参考にした。また遺物の時期表記は小森氏の編年に依拠した。土器編年とその年代観は図１とする。

小森俊寛　2005 『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７世紀～１９世紀－』

図１　土器編年・年代観

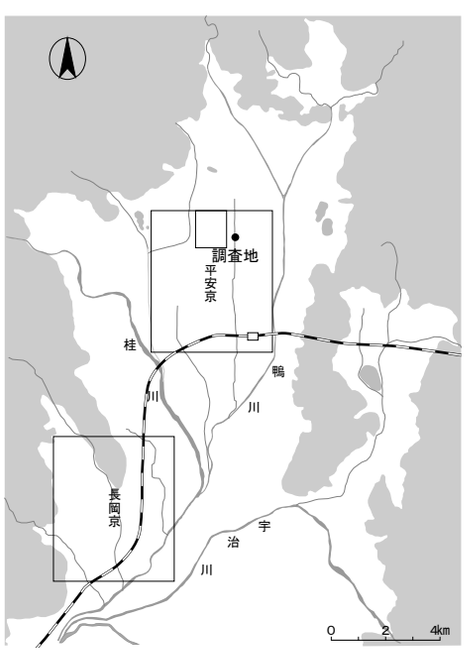


図２　調査地位置図

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．立地と歴史的環境 …… 1
３．遺構 …… 4
（１）基本層序 …… 4
（２）遺構の概略 …… 4
（３）江戸時代後半の遺構（第１面） …… 8
（４）室町時代～江戸時代中頃の遺構（第２面） …… 8
（５）鎌倉時代以降の遺構（第３面） …… 8
（６）平安時代中期～後期の遺構（第４面） …… 10
（７）平安時代前期の遺構（第５面） …… 14
４．遺物 …… 17
（１）土器類 …… 17
ａ．平安時代前期 …… 17
ｂ．平安時代中期～後期 …… 19
ｃ．室町時代 …… 19
ｄ．江戸時代 …… 19
（２）瓦 …… 21
５．まとめ …… 24
１．賀陽親王邸宅跡 …… 25
２．高陽院園池跡 …… 25

挿　図　目　次

図１　土器編年・年代観
図２　調査地位置図
図３　調査区配置図 …… 1
図４　調査前全景（東から） …… 2
図５　現地説明会風景（南西から） …… 2
図６　調査風景１（西から） …… 2
図７　調査風景２（北東から） …… 2
図８　調査対象地と周辺地図 …… 3
図９　南北調査区東壁・南壁・西壁断面図 …… 5
図10　東西調査区東壁・南壁断面図 …… 6
図11　東西調査区南壁断面図 …… 7
図12　第２面　個別遺構図 …… 9
図13　第３・４面　個別遺構図 …… 11
図14　第４面　個別遺構図１ …… 12
図15　第４面　個別遺構図２ …… 13
図16　第５面　個別遺構図１ …… 15
図17　第５面　個別遺構図２ …… 16
図18　出土遺物実測図１ …… 18
図19　出土遺物実測図２ …… 20
図20　出土瓦拓影・実測図１ …… 22
図21　出土瓦拓影・実測図２ …… 23
図22　平安時代前期の邸宅（賀陽親王邸）推定図 …… 27
図23　平安時代中期～後期の高陽院池推定図 …… 27

表　目　次

表１　周辺の発掘・立会調査一覧 …… 3
表２　遺構概要 …… 4
表３　遺物概要 …… 17
表４　出土遺物観察表 …… 28
表５　出土瓦観察表 …… 30

図版目次

図版１　第１面平面図［江戸時代後半］
図版２　第２面平面図［室町時代～江戸時代中頃］
図版３　第３面平面図［鎌倉時代以降］
図版４　第４面平面図［平安時代中期～後期］
図版５　第５面平面図［平安時代前期以前］
図版６　第１面　調査区西半全景（東から）
　　溝１（東から）
図版７　第２面　調査区西半全景（東から）
　　建物１　（北西から）
図版８　第３面　調査区西半全景　（東から）
　　整地 62・落込み 60　（南東から）
　　溝 50（北東から）
図版９　調査区東半全景　（西から）
　　池 65 上層　（北西から）
図版10　池 64 上層　（北西から）
　　池 64・65 下層　（北西から）
図版11　池 65 下層　（北から）
　　池 64 下層　（北西から）
図版12　池 65 下層　構築土除去後　（北から）
　　池 64 下層　構築土除去後　（北東から）
図版13　出土遺物１
図版14　出土遺物２
図版15　出土瓦

１．調査経過

今回の発掘調査は京都市中京区七丁目町の建築に伴う土地開発に先立って行われた。文化財保護法第 93 条に基づく届出（17H679）を受け、京都市文化財保護課による試掘調査が行われた。試掘調査の結果、対象地のうち 152 ㎡の発掘調査が指導された（図３）。合同会社アルケスは開発事業者である株式会社フジヤからの委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査は平成 30 年 8 月 27 日から表土掘削を開始し、３面分の調査を行った。遺構面ごとに京都市文化財保護課の検査を受け、平成 30 年 10 月 19 日に終了した。なお、平成 30 年 10 月 16 日に調査の成果を開発事業者向けに説明会を行い、約 10 名の参加者があった。

２．立地と歴史的環境

調査地は平安京左京二条二坊十町跡にあたり、高陽院と呼ばれた四町四方（九町、十町、十五町、十六町跡）の大邸宅があった。当地は当初桓武天皇の皇子賀陽親王の邸宅であったが、平安時代中期に藤原摂関家の邸宅となり藤原頼通（992-1074）によって壮麗な殿舎に拡張され、広大な苑池を伴った大規模な建物があった。また後朱雀天皇を始め、後冷泉、後三条、白河、堀河、鳥羽の各天皇の里内裏としても利用された（『平安京提要』）。

高陽院跡は、過去に数々の調査が行われ、州浜や景石、中島などの苑池遺構が検出され、平安時代から鎌倉時代を通して多くの遺構･遺物が出土している。なお､今回の調査地のすぐ北の調査（調査５）では、池岸、堀川からの導水施設と考えられる溝などの苑池遺構が確認されている。同様の導水施設と考えられる溝遺構は調査２でも確認されている。また南東側の調査（調査８）では池の南岸が確認され、４回にわたる護岸整備の痕跡や池底の堆積状況が判明した。東側の油小路通をま

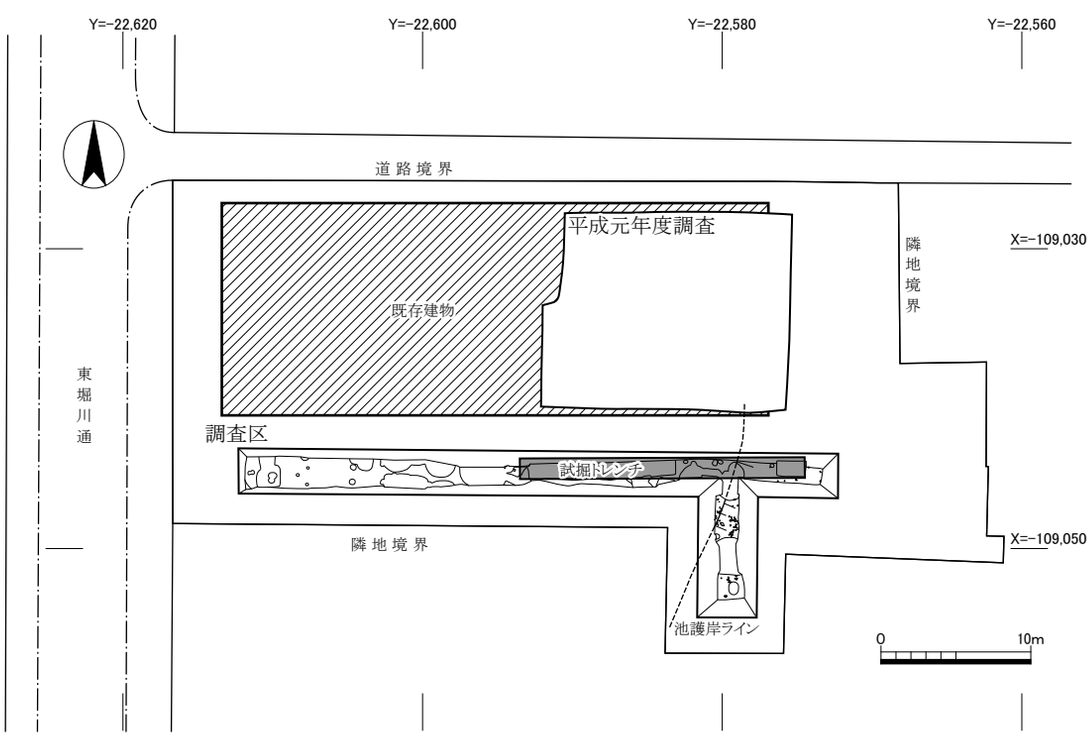


図３　調査区配置図（1:500）

たいだ隣地での調査では、調査６で中島が確認され、調査９では池底の堆積が判明した。北側に転じると、調査１では池の北岸が検出され、多量の瓦を造成土に利用している状況などが確認されている。調査４でも池跡が検出されているが、池底の標高が異なることから別の池（池Ｂ）であると考えられている。

また、調査３では平安時代前期の遺構・遺物が確認されている。九町、十町の二町が賀陽親王邸宅とされていることの傍証となりえている。今回の調査地は調査５と調査８をつなぐ位置にあるため、池の西岸が確認されることが確実である。また、平安時代前期の遺構・遺物も確認される可能性が期待された。

図４　調査前全景（東から）

図５　現地説明会風景（南西から）

図６　調査風景１（西から）

図７　調査風景２（北東から）

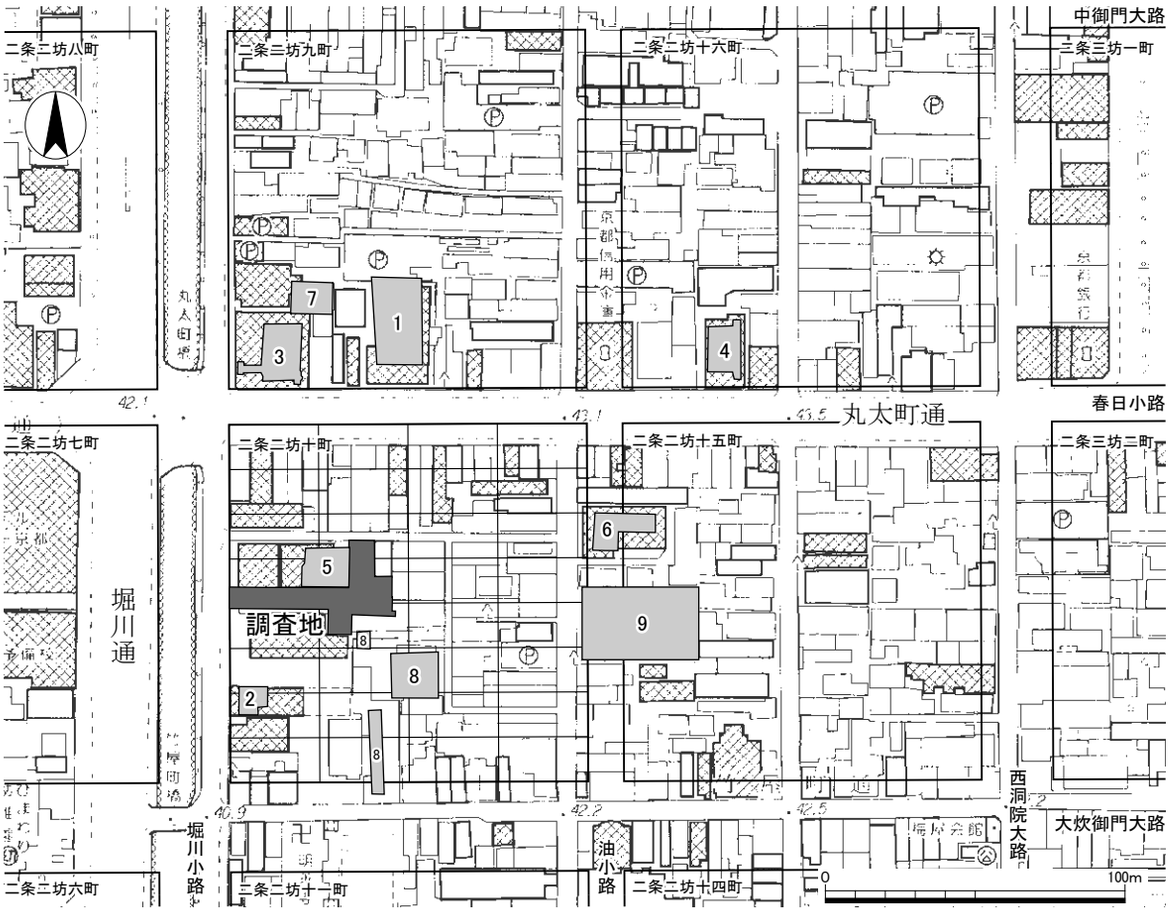


図８　調査対象地と周辺地図（1/2,500）

表１　周辺の発掘・立会調査一覧

番号	調査	検出遺構	文献
1	発掘	池跡、庭石、柱穴列、州浜	『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 （財）京都市埋蔵文化財研究所　1982年
2	立会	排水路か	『平安京跡発掘調査概要　昭和56年度』 （財）京都市埋蔵文化財研究所　1982年
3	発掘	園池、景石	『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 （財）京都市埋蔵文化財研究所　1993年
4	発掘	池、州浜、溝	『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 （財）京都市埋蔵文化財研究所　1993年
5	発掘	池、東西溝	『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 （財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年
6	発掘	池、地業遺構	『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 （財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年
7	発掘	建物、池	『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 （財）京都市埋蔵文化財研究所　1999年
8	発掘	池、道路、溝、土坑	『平安京左京二条二坊十町（高陽院）跡』2005-7 （財）京都市埋蔵文化財研究所　2005年
9	発掘	池、道路	『高陽院・平安京左京二条二坊十五町跡』 株式会社　文化財サービス　2018年

３．遺構

（１）基本層序（図９～ 11）

現地表面から約 1.0 ～ 1.7 ｍまで掘り下げて調査を行った。現地表面は東から堀川に向かう西にかけて傾斜しており、調査地東で標高 42.0 ｍ、調査地西側で 41.3 ｍを測る。標高 40.9 ｍ前後で近世と考えられる整地層を確認した。以下、室町時代の堆積層（黄褐色泥砂層）、鎌倉時代の整地層（灰黄褐色泥砂層）、平安時代の整地層（黄灰色シルト）、地山（黄褐色シルト、青灰色砂礫、褐灰色砂礫層）を確認した。地山の標高は 40.5 ～ 40.6 ｍ前後で、平安時代の整地層が確認できる。調査区東側では標高 40.3 ｍまで傾斜し、傾斜部で黄灰色中砂層や拳大の礫を多く含む層があり、池護岸の構築土や堆積土が確認できる。

地山は調査区の中で異なる様相をみせる。調査区全体の地山のベースは粒径３㎝以下の砂礫層（図 10・11-60 層）で、調査区西端や中央から東側では黄褐色もしくは黒褐色シルトがベースの砂礫層の上層に厚く堆積している（図 10・11-56・59 層）。このシルト層は当地周辺では聚楽土と呼ばれ、現代でも壁土などに利用される建材である。後述するが、調査区内では江戸時代を中心とした大小様々な土坑が確認され、ほとんどが土取り穴と考えられる。中央では拳大の砂礫層が幅約 6.0 ｍにわたって確認できる（図 10-54 層）。無遺物層で、旧流路と考えられる。

（２）遺構の概略

今回の調査では平安時代から江戸時代までの遺構を検出した（表２）。本書では遺構面を５面としたが、調査では調査区西側を第１面、第２面に相当する遺構面、第３面と第４面に相当する遺構面、第５面に相当する遺構面の３遺構面を調査した。また反転した調査区東側では第１面から第３面に相当する遺構面、第４・第５面に相当する遺構面を調査した。これは調査区東側の大半を占める池６４・６５の堆積を段階的に調査したためで、本書をまとめるにあたって再整理した。以下、調査した遺構面順に特筆すべき遺構を詳述する。

表２　遺構概要

時代	遺構	備考
平安時代前期以前	溝50、落ち込み60、整地62、土抗58、土抗82	
平安時代中期～後期	池64、池65、礎石89、溝21、土坑23	
鎌倉時代以降	建物１、柱穴13、ピット87、ピット88、土抗66、土抗67	
室町時代～江戸時代中頃	土抗３、土抗８、土坑14、土坑16、土坑18、土坑69、土坑70、土坑71、土坑73、土坑74、土坑86	
江戸時代後半	溝１、埋甕４、土坑10	

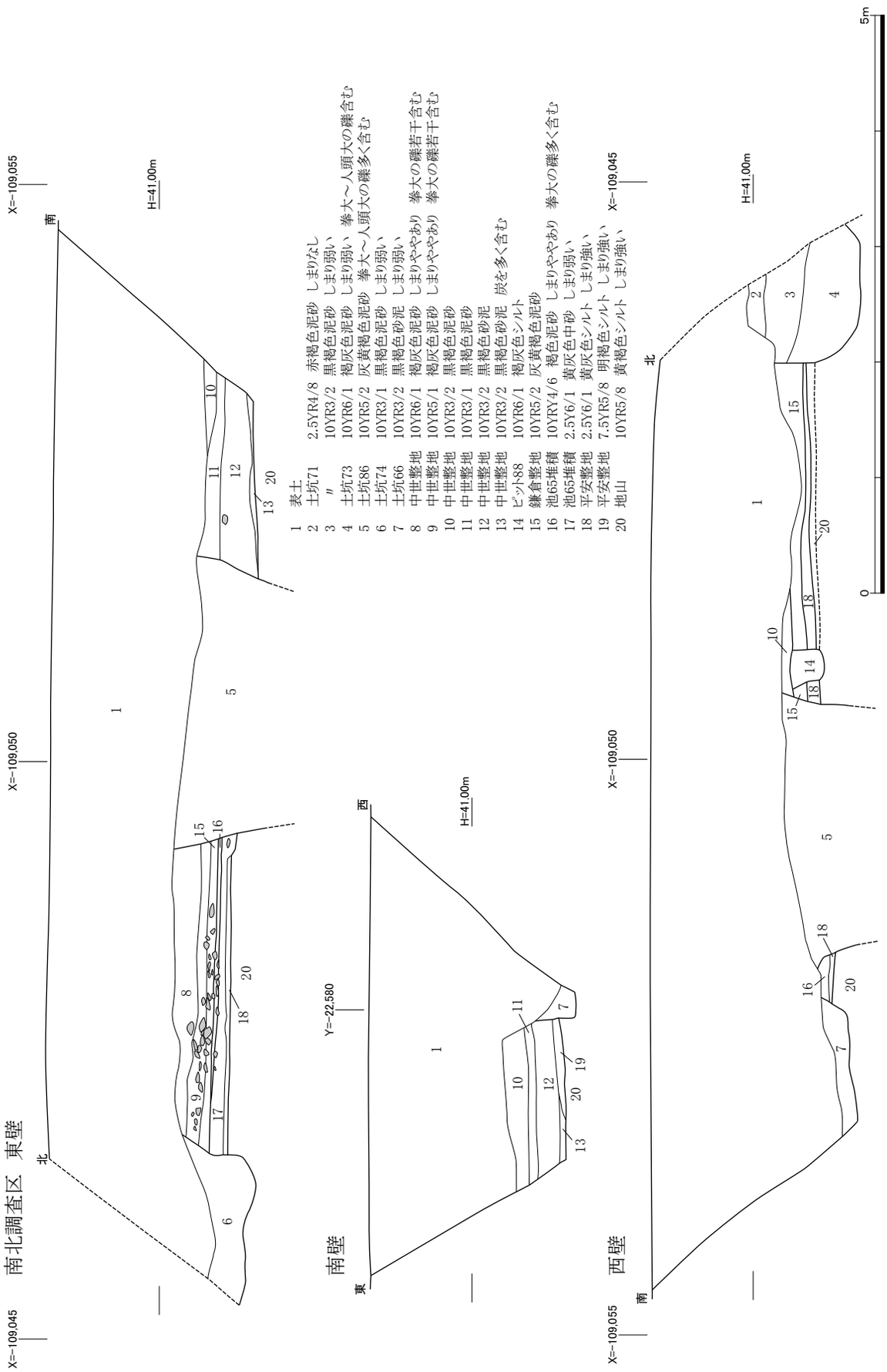


図９　南北調査区東壁・南壁・西壁断面図（1:50）

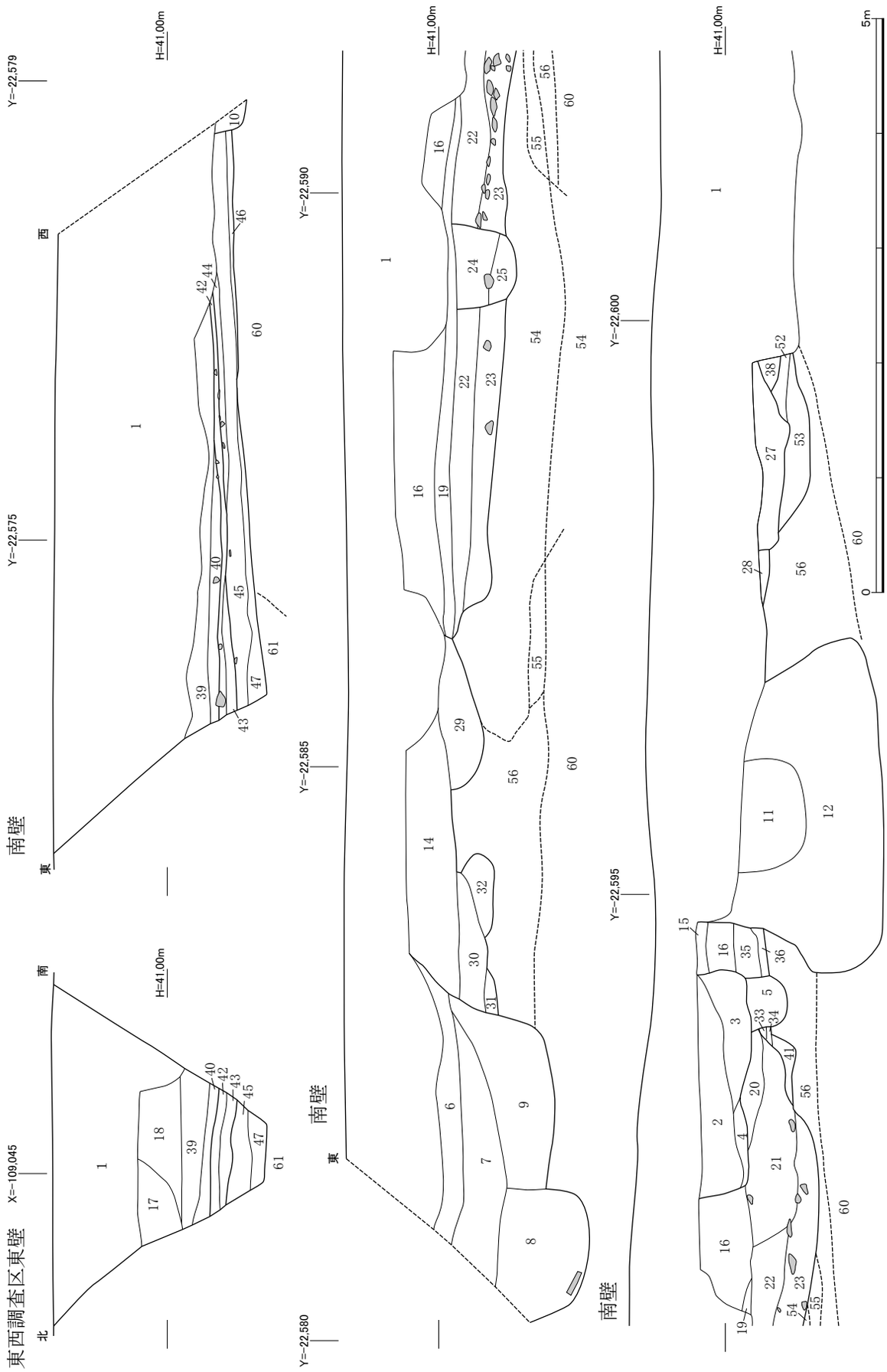
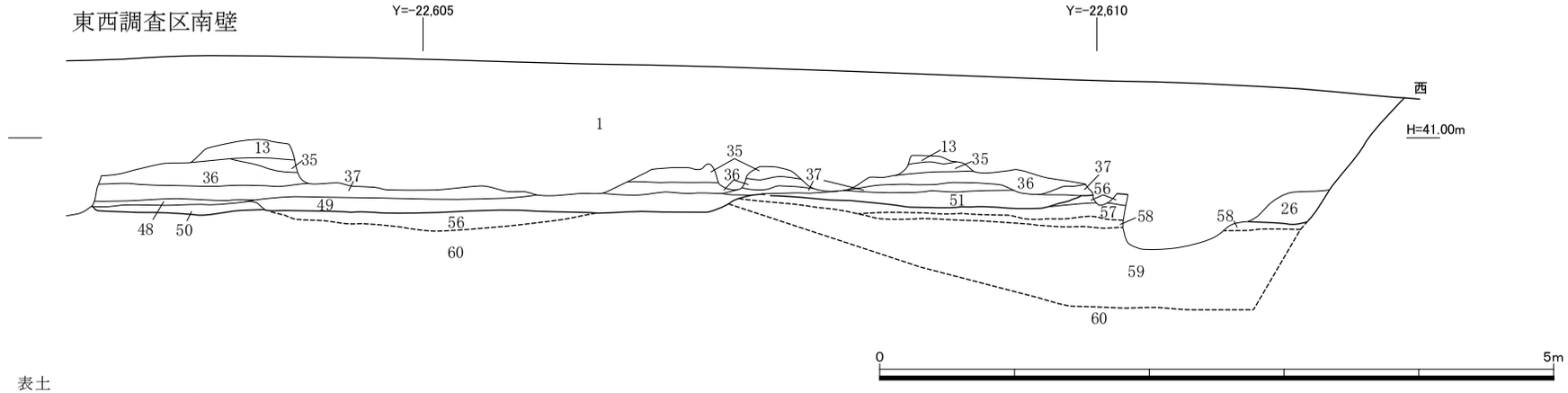


図 10　東西調査区東壁・南壁断面図（1:50）



1　表土
2　土坑10　10YR4/2　灰黄褐色砂泥
3　〃　10YR2/1　黒色砂泥　しまりなし　炭・灰を多く含む
4　〃　10YR2/1　黒色砂泥　しまりなし　炭・灰を多く含む
5　〃　10YR2/1　黒色砂泥　しまりなし
6　土坑71　2.5YR4/8　赤褐色泥砂　しまりなし
7　〃　10YR3/2　黒褐色泥砂　しまり弱い
8　〃　10YR6/1　褐灰色泥砂　しまり弱い　拳大～人頭大の礫含む
9　土坑70　10YR3/1　黒褐色泥砂　しまり弱い
10　土坑69　10YR3/1　黒褐色泥砂　しまりややあり
11　土坑7　10YR2/1　黒色泥砂　しまりなし
12　土坑8　10YR2/1　黒色砂泥　しまりなし　焼土粒を非常に多く含む　拳大の礫を多く含む
13　江戸整地　10YR6/2　灰黄褐色泥砂
14　〃　10YR3/2　黒褐色泥砂　しまりややあり　拳大の礫多く含む
15　〃　10YR5/8　黄褐色泥砂　しまりややあり
16　〃　10YR6/2　灰黄褐色泥砂　しまりややあり
17　中世土坑　10YR6/1　褐灰色砂礫　しまりなし　拳大の礫を多く含む
18　中世整地　10YR5/8　黄褐色シルト　しまりあり
19　中世整地　10YR5/2　灰黄褐色泥砂　拳大の礫を多く含む
20　土坑18　10YR5/2　灰黄褐色泥砂　しまりややあり
21　〃　10YR6/2　灰黄褐色泥砂　しまりややあり
22　〃　10YR6/2　灰黄褐色泥砂　しまりややあり
23　〃　10YR3/2　黒褐色泥砂　しまりややあり　拳大の礫多く含む
24　土坑16　10YR3/2　黒褐色泥砂　しまりややあり
25　〃　10YR3/1　黒褐色泥砂　しまりややあり　拳大の礫多く含む
26　中世整地　10YR5/2　灰黄褐色泥砂　しまり弱い
27　中世土坑　10YR5/1　褐灰色シルト質土
28　〃　10YR5/1　褐灰色シルト質土
29　〃　10YR6/1　褐灰色泥砂　しまり弱い
30　〃　10YR3/2　黒褐色泥砂　しまりややあり
31　〃　2.5Y5/1　黄灰色泥砂　しまりややあり
32　〃　2.5Y5/1　黄灰色泥砂　しまりややあり
33　中世整地　10YR3/2　黒褐色泥砂　しまりややあり　拳大の礫少量含む
34　中世整地　10YR6/2　灰黄褐色砂礫　しまり弱い　0.05mの礫少量含む
35　〃　10YR5/1　褐灰色泥砂
36　〃　10YR4/1　褐灰色泥砂　拳大の礫少量含む
37　鎌倉整地か　2.5YR4/1　黄灰色泥砂　拳大の礫多く含む
38　柱穴30　10YR5/2　灰黄褐色泥砂
39　池64堆積　10YRY3/2　黒褐色泥砂　しまりややあり
40　〃　10YR6/2　灰黄褐色泥砂　しまりややあり　拳大の礫多く含む
41　溝21　2.5Y3/2　黒褐色シルト　しまりややあり
42　池64堆積　10YR4/6　褐色泥砂　しまりややあり　拳大の礫多く含む
43　〃　10YR4/4　褐色泥砂　しまりややあり　拳大の礫多く含む
44　〃　2.5Y6/1　黄灰色中砂　しまりややあり　拳大の礫少量含む　汀
45　〃　2.5Y6/1　黄灰色中砂　しまりなし　～0.05mの礫若干含む
46　平安整地　7.5YR5/6　明褐色シルト質土　しまりややあり　～0.05mの礫多く含む
47　池64堆積　N6/　灰色シルト粘土　しまりややあり　拳大の礫若干含む
48　落ち込み60　10YR6/1　褐灰色シルト
49　〃　2.5Y6/1　黄灰色シルト　粘性ややあり　炭多く含む　拳大の礫少量含む
50　整地62　2.5Y6/1　黄灰色シルト　しまり強い　0.05mの礫若干含む
51　溝50　2.5Y6/1　黄灰色砂礫　しまりあり　拳大の礫多く含む
52　弥生土坑　10YR6/6　明黄褐色シルト　しまりややあり
53　〃　10YR6/6　明黄褐色シルト　しまりやや弱い
54　地山　10YR6/1　褐灰色砂礫　しまり弱い　拳大～人頭大の礫層
55　〃　10YR4/4　褐色細砂　しまりなし　拳大の礫若干含む
56　〃　10YR5/6　黄褐色シルト　しまりあり
57　〃　7.5YR6/6　橙色シルト　しまりあり　～0.03mの砂礫多く含む
58　〃　7.5YR6/6　橙色砂礫　しまりあり　～0.05mの砂礫層
59　〃　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまりあり
60　〃　7.5YR5/8　明褐色砂礫　しまりややあり　～拳大の砂礫層
61　〃　5B5/1　青灰色砂礫　しまりややあり　～拳大の砂礫層　58層がグライ化

図 11　東西調査区南壁断面図（1:50）

（３）江戸時代後半の遺構（第１面）

黄褐色泥砂層上面で検出した遺構である。水路などを検出した（図版１）。

溝１（図版１）　調査区西で検出した三和土と瓦製Ｕ字溝でできた東西溝で、瓦製の蓋で覆われた暗渠である。溝の内幅は 0.22 ｍ、深さ 0.25 ｍを測る。調査区西端から 9.5 ｍで南東方向に向きを変える。調査区西端から 4.0 ｍまでは瓦製Ｕ字溝を連結しており、それより東側が三和土製の溝である。集水桝の痕跡と考えられる方形土坑には砕かれた三和土片が多く含まれていた。溝底面は西側に傾斜しているため、生活排水を堀川へ排水する目的と考えられる。

江戸時代後半に設置されたものと考えられるが、西側で検出した瓦製Ｕ字溝は近代以降に付け替えられた可能性が考えられる。

埋甕４（図版１）　調査区中央（Ａ４）で検出した、施釉陶器の甕の底部を埋設した埋甕遺構である。埋甕の径は 0.30 ｍ、深さは 0.25 ｍである。埋土中からは遺物の出土はない。江戸時代後半と考えられる。

（４）室町時代～江戸時代中頃の遺構（第２面）

褐色泥砂層上面で検出した遺構である。土取り穴などを検出した（図版２）。

土坑３（図版２）　調査区西（Ａ２・Ｂ２）で検出した方形土坑である。長辺 1.60 ｍ、短辺 1.26 ｍ、検出面からの深さは 0.25 ｍを測る。埋土は黒色泥砂で、炭を多く含む。土師器、陶磁器、塩壷などが出土した。

土坑８（図 12）　調査区中央（Ａ４・Ｂ４）で検出した大型土坑である。東西幅 3.02 ｍ、検出面からの深さ 1.62 ｍを測る。土坑の壁面はオーバーハングしている。埋土は焼土片を多く含む。埋土からは土師器、陶磁器などが出土した。

土坑６９～７４（図 12）　調査区東（Ｂ７・８）で検出した土坑群である。幅 0.80 ｍ～ 1.85 ｍ規模の楕円形や方形の土坑が重複している。検出面からの深さは 0.40 ～ 1.56 ｍを測る。シルト質地山が砂礫層に切り替わる深さでほぼ底となっているため、土取り穴と考えられる。埋土からは土師器、陶磁器などが出土した。

土坑８６（図版２）　調査区東（Ｃ８）で検出した大型土坑である。南北幅 2.46 ｍ、検出面からの深さ 0.80 ｍまで掘削したが、底面まで完掘していない。埋土は灰黄褐色泥砂で拳大から人頭大の礫を多く含む。土取り穴と考えられる。埋土からは土師器、陶磁器などが出土した。

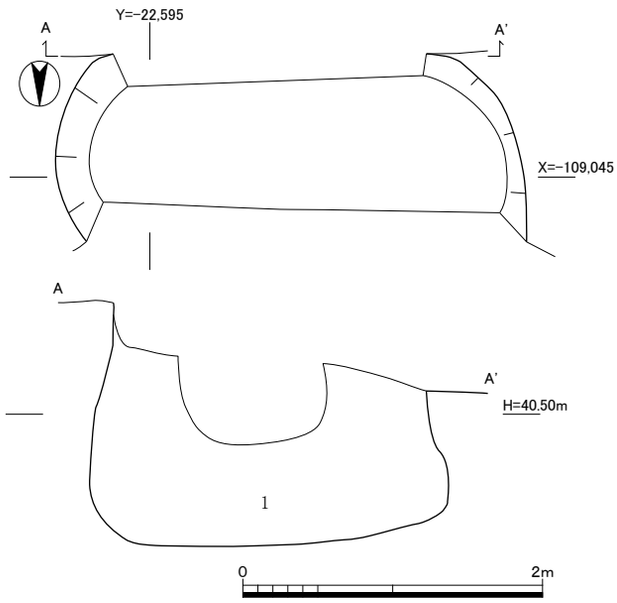
土坑１４（図版２）　調査区西（Ａ１）で検出した土坑である。調査区西側に延長する。埋土は褐色シルト質土で、土師器などが出土した。

土坑１８（図版２）　調査区中央（Ｂ５・Ｂ６）で検出した大型土坑である。東西幅 7.42 ｍ、検出面からの深さ 1.2 ｍを測る。調査区外南方向に延長し、遺構の全容は不明である。埋土は黒褐色泥砂で拳大の礫を多く含んでいた。土師器や陶器が出土した。

（５）鎌倉時代以降の遺構（第３面）

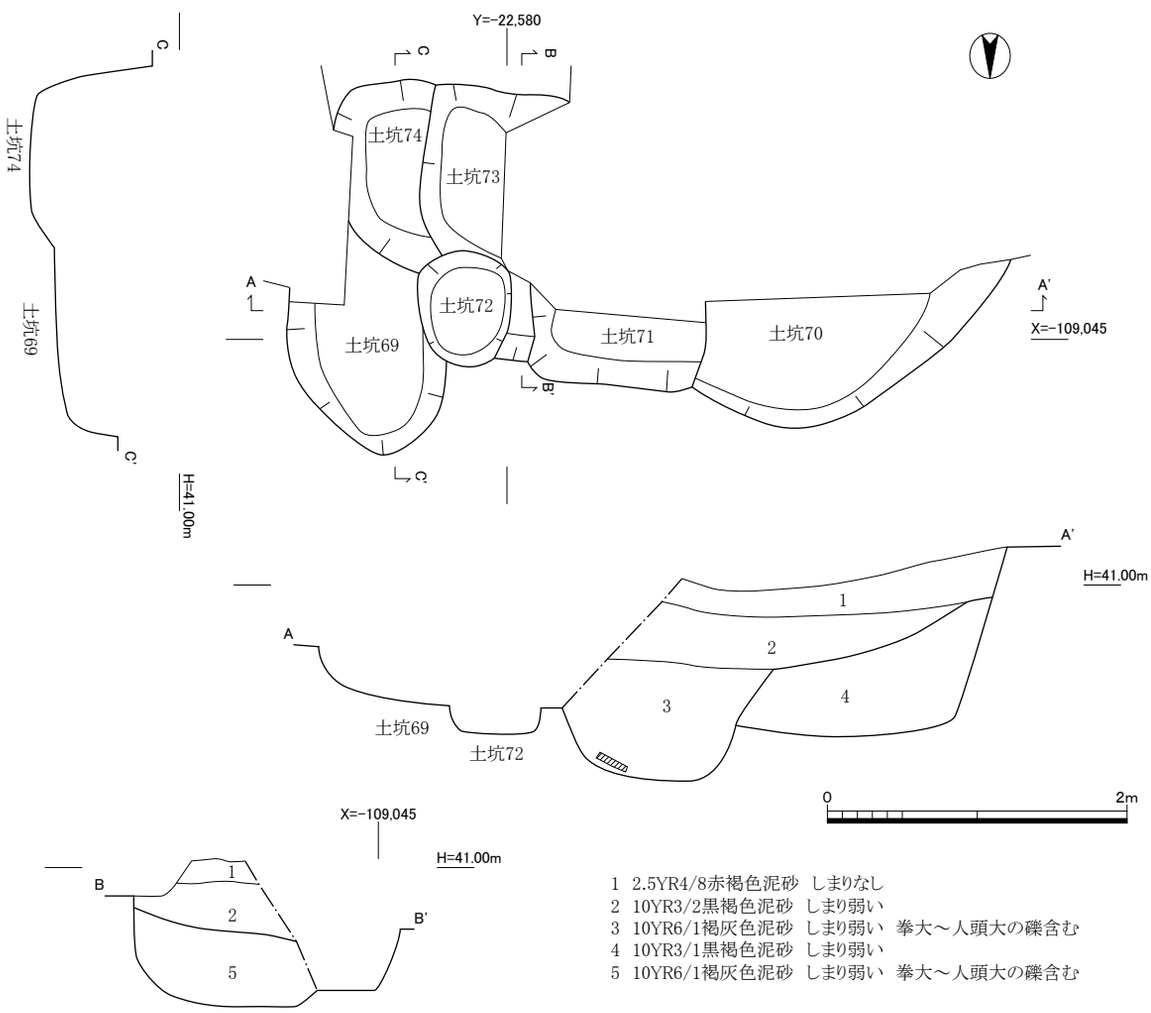
褐色泥砂層などの上面で検出した遺構である。掘立柱建物やピットを検出した。（図版３）

建物１（図 13）　調査区西（Ａ３・Ａ４・Ｂ３・Ｂ４）で検出した東西３間、南北２間以上と推定



1　10YR2/1黒色砂泥　しまりなし　焼土粒を非常に多く含む　拳大の礫を多く含む

土坑8遺構図(1:50)



土坑69～74遺構図(1:50)

図 12　第２面　個別遺構図

できる掘立柱建物である。建物規模は東西 5.0 m、南北１.52 m以上で、柱穴５４、柱穴５９、柱穴３４、柱穴３０から構成される。柱穴は掘方が 0.32 m～ 0.36 m、柱痕が直径 0.24 mである。埋土から土師器や緑釉陶器が出土した。

ピット８７（図 13） 調査区東（Ａ８）で検出した方形ピットである。柱痕は確認できなかった。埋土は褐灰色シルト質土で、土師器の小片が出土した。

ピット８８（図 13） 調査区東（Ｂ７）で検出した小穴である。柱痕はない。埋土は褐灰色シルト質土で、土師器の小片が出土した。

土坑６６（図版３） 調査区東（Ｃ７）で検出した土坑である。南北検出長 1.25 m、東西検出長 0.22 m、検出面からの深さ 0.15 mである。調査区外南西方向に延長する遺構の一部である。埋土は黒褐色砂泥である。瓦が多く出土した。

（６）平安時代中期～後期の遺構（第４面）

黄灰色シルト整地層や黄褐色シルト地山層上面で検出した遺構である。池の護岸や溝、土坑を検出した。池の護岸は二段階の堆積を確認した（図版４）。

池６４・６５（図 14・15） 調査区東（Ａ８・Ｂ８・Ｃ８・Ａ９・Ｂ９）で検出した池岸で、東側の傾斜を池６４、南側の傾斜を池６５とした。池６４と池６５は同一の池で、南東方向に傾斜する埋土の堆積を段階的に確認した。上層から黒褐色泥砂（図 10-39 層）、灰黄褐色泥砂（図 10-40 層）、褐色泥砂（図 10-42 層）、黄灰色中砂（図 10-44・45 層）の堆積で、各堆積の上面では 0.05 mから拳大の礫を含んでいた。下層にいくにつれ礫の大きさが小さくなる傾向にあった。

最下層の黄灰色中砂堆積上面で径 0.05 m～ 0.10 mの礫を検出した。礫のまとまった部分の標高は 39.8 m～ 39.9 mで、これが池の汀と考えられる。また汀から続く池の陸部は層厚 0.05 m程度の黄灰色シルト・中砂整地で、整地に埋め込まれた礎石８９を検出した。

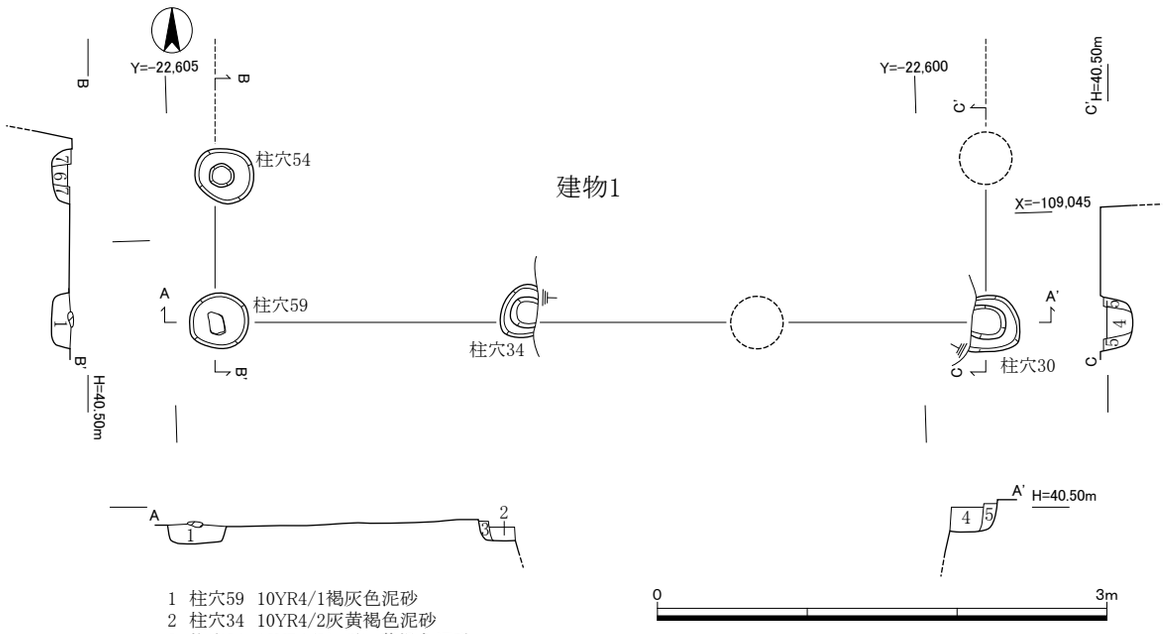
黄灰色中砂層の直上に堆積していた褐色泥砂上面でまとまった礫を検出した。この礫群は黄灰色中砂堆積上面で検出した礫よりも大振りで拳大の大きさが多かった。礫群は池６４では岸部の傾斜が水平に変換する位置で検出し、池６５では傾斜部で全体的に検出した。池の作り替えによる造成土と考えられるが、この段階での汀ラインは不明瞭である。

さらに上層の黒褐色泥砂・灰黄褐色泥砂も拳大以上の礫を多く含んでいたが、規格的な配置ではなかったため、池の造作ではなく埋没過程の埋土に混入したものと考えられる。褐色泥砂層からは土師器や陶器が、黄灰色中砂層からは土師器や緑釉陶器、灰釉陶器などが出土した。

礎石８９（図 15） 調査区東（Ｂ８）で検出した平面菱形で上面が平坦な礎石である。一辺が 0.21 mで、黄灰色中砂整地に埋め込まれていた。ただし対応する礎石や柱穴は確認できなかった。

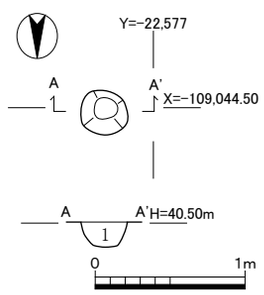
溝２１（図 13） 調査区中央（Ｂ５）で検出した幅 0.52 m、深さ 0.20 mを測る溝である。検出長は 1.20 mで西北西方向に傾斜する。埋土は黒褐色シルト質土で土師器などが出土した。

土坑２３（図 13） 調査区中央（Ａ５）で検出した長軸 0.60 m、短軸 0.56 mの楕円形土坑である。埋土は暗オリーブ褐色シルト質土で、土師器の小片が出土した。



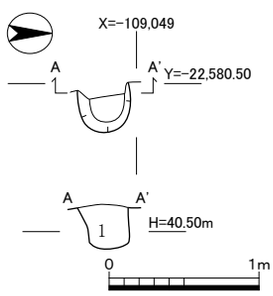
1 柱穴59 10YR4/1褐灰色泥砂
2 柱穴34 10YR4/2灰黄褐色泥砂
3 柱穴34 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
4 柱穴30 10YR4/2灰黄褐色泥砂
5 柱穴30 10YR5/2灰黄褐色泥砂
6 柱穴54 10YR3/2黒褐色泥砂
7 柱穴54 10YR3/1黒褐色泥砂

建物1遺構図(1:50)



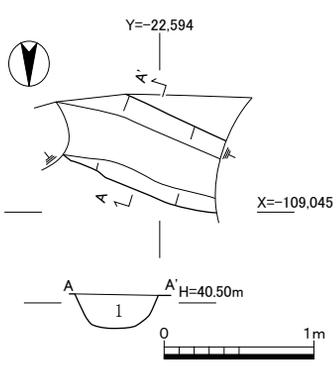
1 10YR5/1褐灰色シルト

ピット87遺構図(1:50)



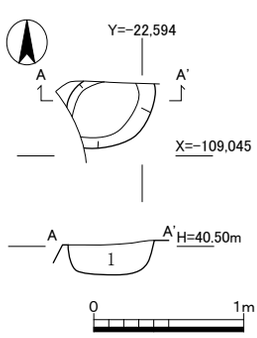
1 10YR6/1褐灰色シルト

ピット88遺構図(1:50)



1 2.5Y3/2黒褐色シルト しまりややあり

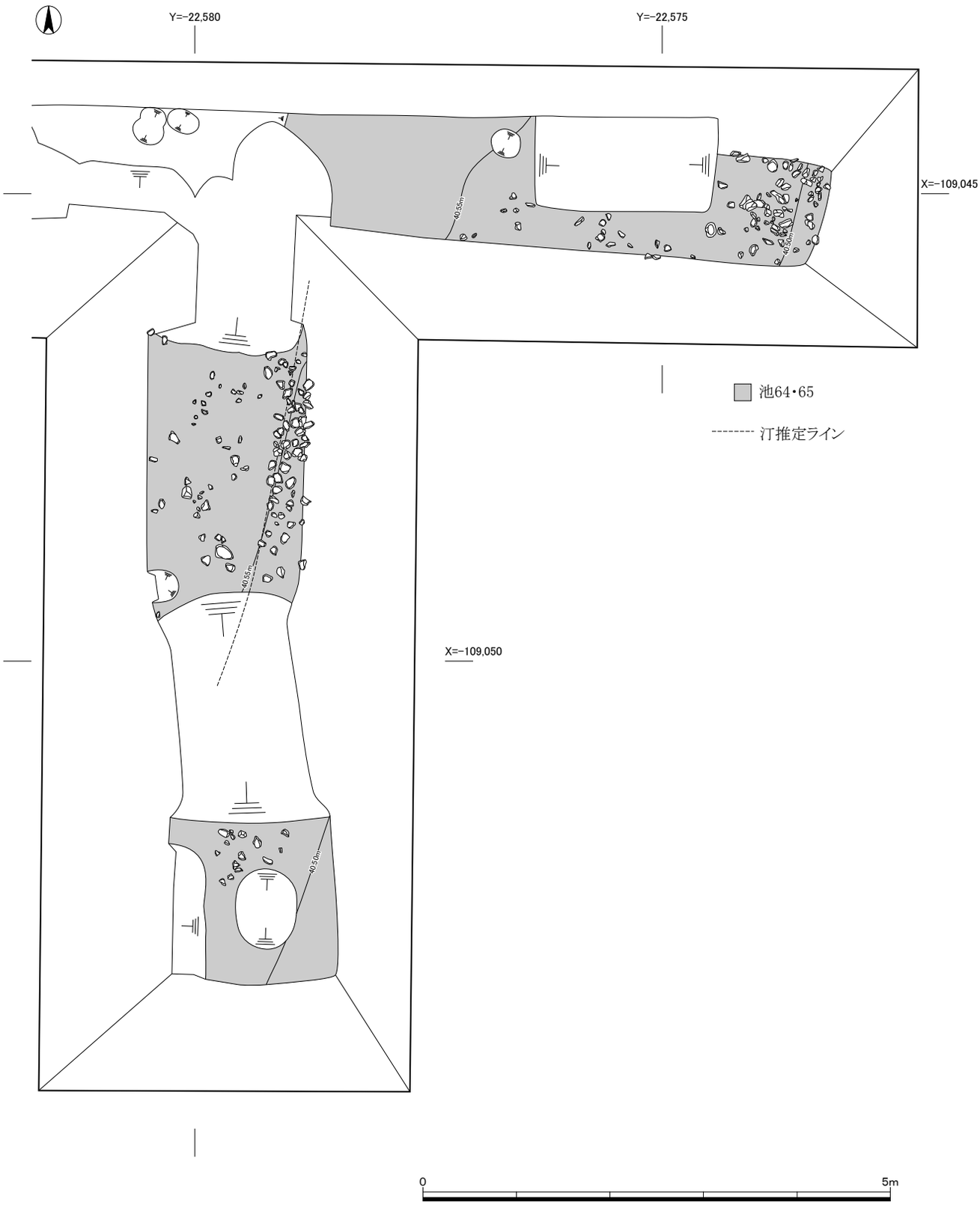
溝21遺構図(1:50)



1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト しまりややあり

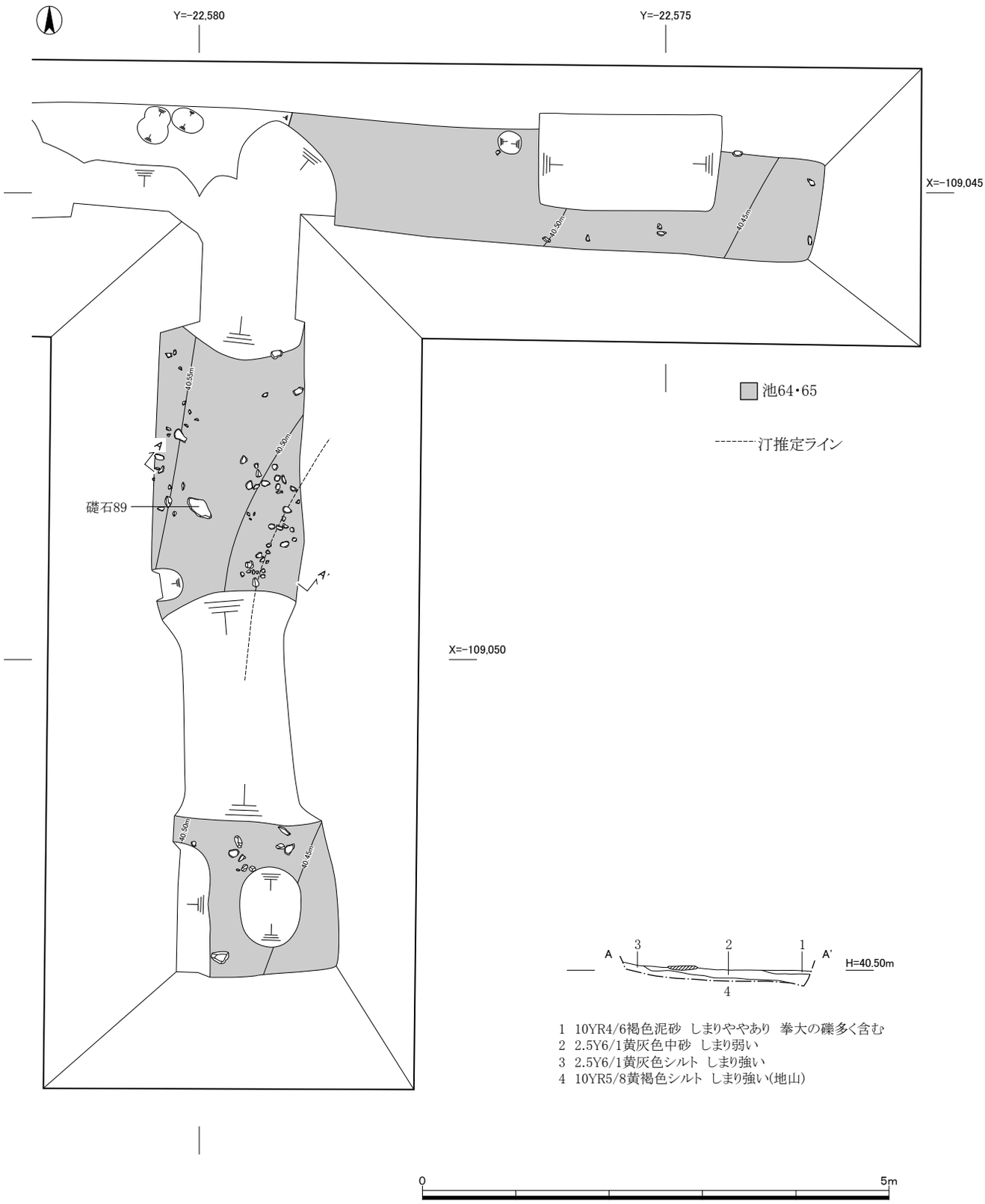
土坑23遺構図(1:50)

図 13 第３・４面 個別遺構図



池 64・65（上層）遺構図（1:60）

図 14　第 4 面　個別遺構図 1



池 64・65（下層）遺構図（1:60）

図 15　第４面　個別遺構図２

（７）平安時代前期の遺構（第５面）

整地６２や黄褐色シルト（地山）を基盤とした面で検出した遺構である。主に調査区西側で遺構・遺物を検出した（図版５）。

溝５０（図 16） 調査区西（Ａ２・Ｂ２）で検出した、幅 2.32 ｍ、深さ 0.10 ｍを測る浅い溝である。埋土は黄灰色砂礫で径 0.05 ｍから拳大の礫を多く含む。土師器の小片が出土した。

落ち込み６０（図 17） 調査区西（Ａ２～Ｂ３）で検出した東西幅 4.24 ｍ、深さ 0.11 ｍを測る落ち込みで、西側は直線的で東側は整地 62 の緩やかな傾斜に沿った形状となる。埋土は黄灰色シルト質土で微細な炭片を多量に含む。埋土からは土師器、陶器が出土した。

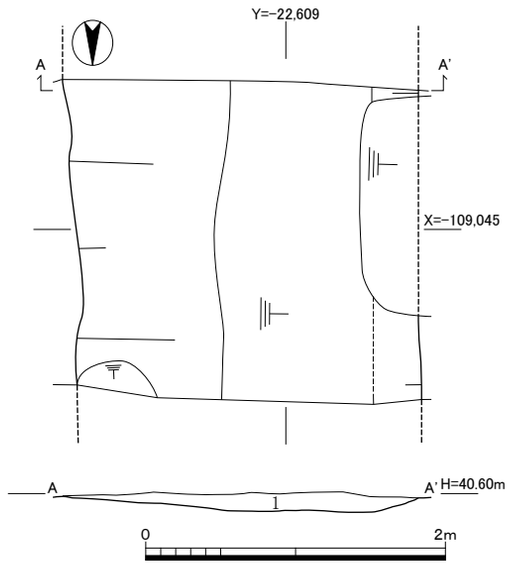
土坑６１（図 16） 調査区中央（Ａ４）で検出した楕円形土坑で、調査区北側に延長する。東西方向の長軸は 2.42 ｍ、南北方向は検出長 1.22 ｍを測る。後世の攪乱によって土坑の中心が壊されていた。埋土は褐灰色シルト質土で遺物が集中して出土する層序があった。埋土からは土師器や灰釉陶器、緑釉陶器、須恵器などが出土した。

整地６２（図 17） 調査区西（Ａ３）で検出した黄灰色シルト整地層で、固く締まる。整地の範囲は東西 3.68 ｍを測り、東側で土坑 61 によって壊されている。西側はゆるやかに傾斜して落ち込み 60 へと連続する。南側へも傾斜し、調査区南側へも延長する。整地は明褐色砂礫層の上面に最大 0.30 ｍの層厚で形成されている。

埋土からは土師器、灰釉陶器、須恵器、黒色土器などが出土した。

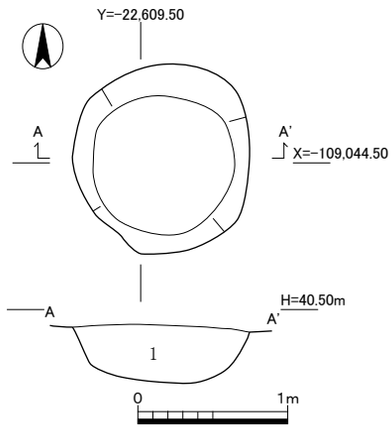
土坑５８（図 16） 調査区西（Ａ２）で検出した円形土坑で、直径 1.24 ｍ、深さ 0.38 ｍを測る。埋土は灰黄褐色砂泥で、土師器が出土した。溝５０によって壊されている。

土坑８２（図 16） 調査区東（Ａ７）で検出した略方形土坑で、短軸 0.57 ｍ、長軸 0.75 ｍ、深さ 0.24 ｍを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、土師器が出土した。



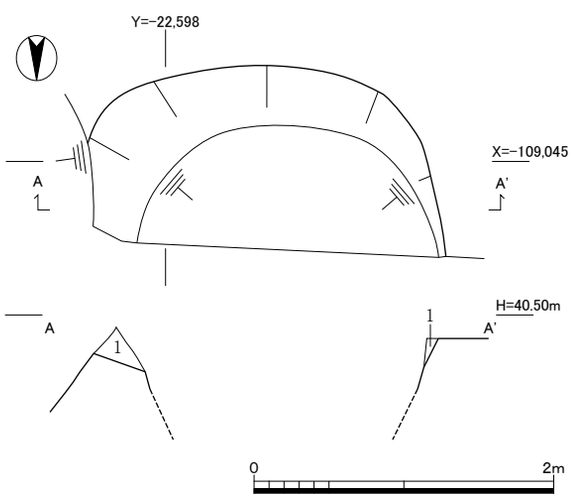
1　2.5Y6/1黄灰色砂礫　しまりあり　拳大の礫多く含む

溝50遺構図(1:50)



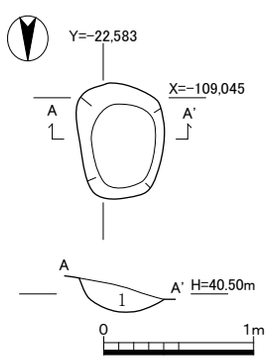
1　10YR4/2灰黄褐色砂泥　しまりややあり

土坑58遺構図(1:50)



1　10YR4/1褐灰色シルト質土　しまりあり

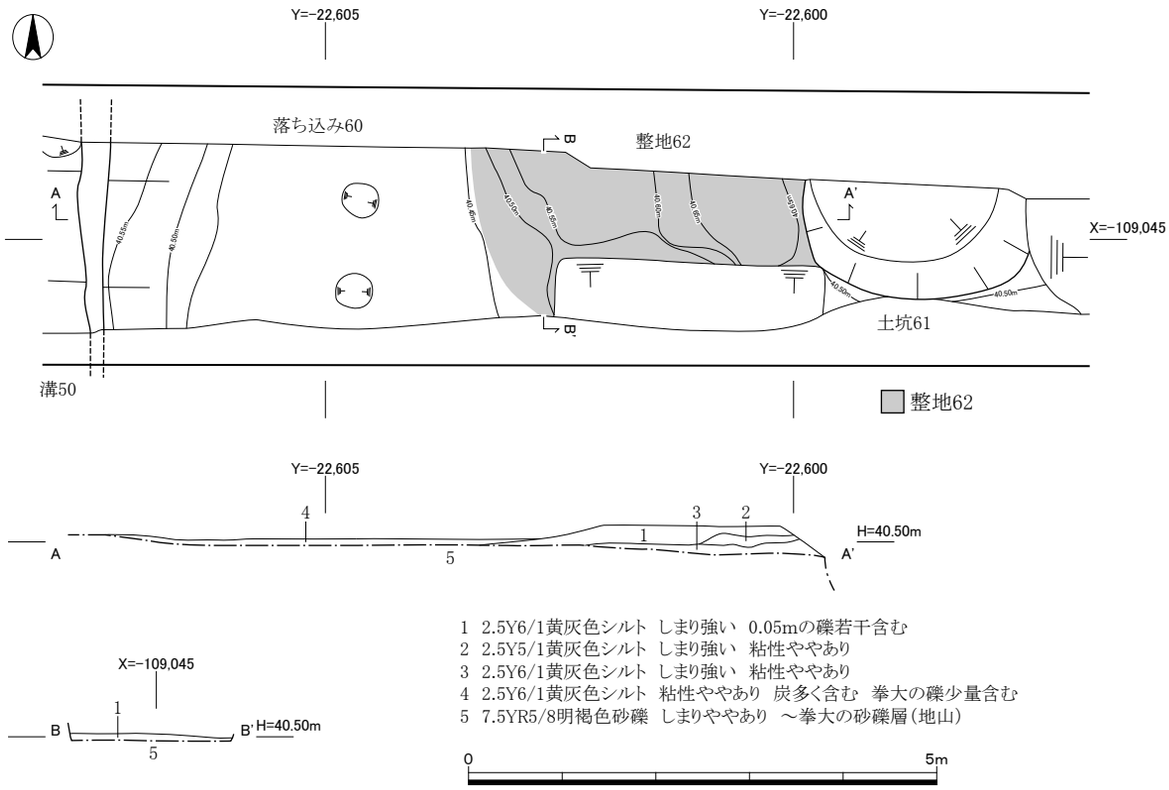
土坑61遺構図(1:50)



1　10YR4/2灰黄褐色シルト　しまり強い

土坑82遺構図(1:50)

図 16　第５面　個別遺構図１



1 2.5Y6/1黄灰色シルト しまり強い 0.05mの礫若干含む
2 2.5Y5/1黄灰色シルト しまり強い 粘性ややあり
3 2.5Y6/1黄灰色シルト しまり強い 粘性ややあり
4 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性ややあり 炭多く含む 拳大の礫少量含む
5 7.5YR5/8明褐色砂礫 しまりややあり ～拳大の砂礫層(地山)

0 5m

落込み 60・整地 62 遺構図（1:80）

図 17　第 5 面　個別遺構図 2

４．遺物

（１）土器類

ａ．平安時代前期

整地62（図18）　１は土師器の碗である。外面にケズリ調整を行う。２・３は須恵器の蓋である。２はやや厚みがあり、丸みを帯びる。３は平坦で鋭い稜線を残す。４～６は須恵器の杯身である。７は壷の底部である。４～７はすべて高台がつく。８・９は灰釉陶器である。８は稜皿で、９は碗である。10は緑釉陶器の碗である。平高台である。11・12は土師器の高坏である。11は脚部で７面に面取りする。12は11と同一個体か。13は須恵器の瓶である。14・15は須恵器の鉢である。出土した土師器皿は京都Ⅰ期新段階～Ⅱ期古段階である。

落ち込み60（図18）　16～23は土師器の杯で、口径は14.0～16.4cmを測る。外面のケズリ調整が認められる個体が少量ある。21の外面には漆状被膜が付着する。24・25は須恵器の杯蓋である。26・27は灰釉陶器である。26は碗で底部をヘラ切りする。27は稜皿で底部をヘラ切りし、三日月高台を貼り付ける。重ね焼きの痕跡が残る。28は緑釉陶器の碗である。平高台である。29は須恵器もしくは灰釉陶器で、水注の取手である。30・31は土師器の甕である。出土した土師器坏は京都Ⅰ期新段階～Ⅱ期古段階である。

土坑61（図18）　32・33は土師器の杯で、口径は12.6～13.6cmである。34は灰釉陶器の蓋である。口径18.0cmを測る。35～37は緑釉陶器である。35・36は碗、37は皿である。38は土師器の高杯である。脚部を７面に面取りする。39は灰釉陶器の鉢である。40・41は須恵器の鉢である。40は口縁部が屈曲し、41は直線的に広がる。42は土師器の甕である。口唇部内面に煤が付着する。出土した土師器坏は京都Ⅰ期新段階～Ⅱ期古段階である。

整地（図19）　43は落込み60などが埋没した後の整地層から出土した。43は土師器の杯で、口径は

表３　遺物概要

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	弥生土器				
平安時代前期	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、瓦		土師器18点、緑釉陶器６点、灰釉陶器７点、須恵器14点、軒瓦２点		
平安時代 中期～後期	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、須恵器、瓦		土師器８点、灰釉陶器３点、黒色土器３点、須恵器１点、緑釉陶器５点、軒瓦８点		
室町時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器		土師器５点、焼締陶器１点、		
江戸時代	土師器、磁器、陶器		土師器２点、磁器２点		
合　計		10箱	85点（３箱）	０箱	７箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より３箱多くなっている。

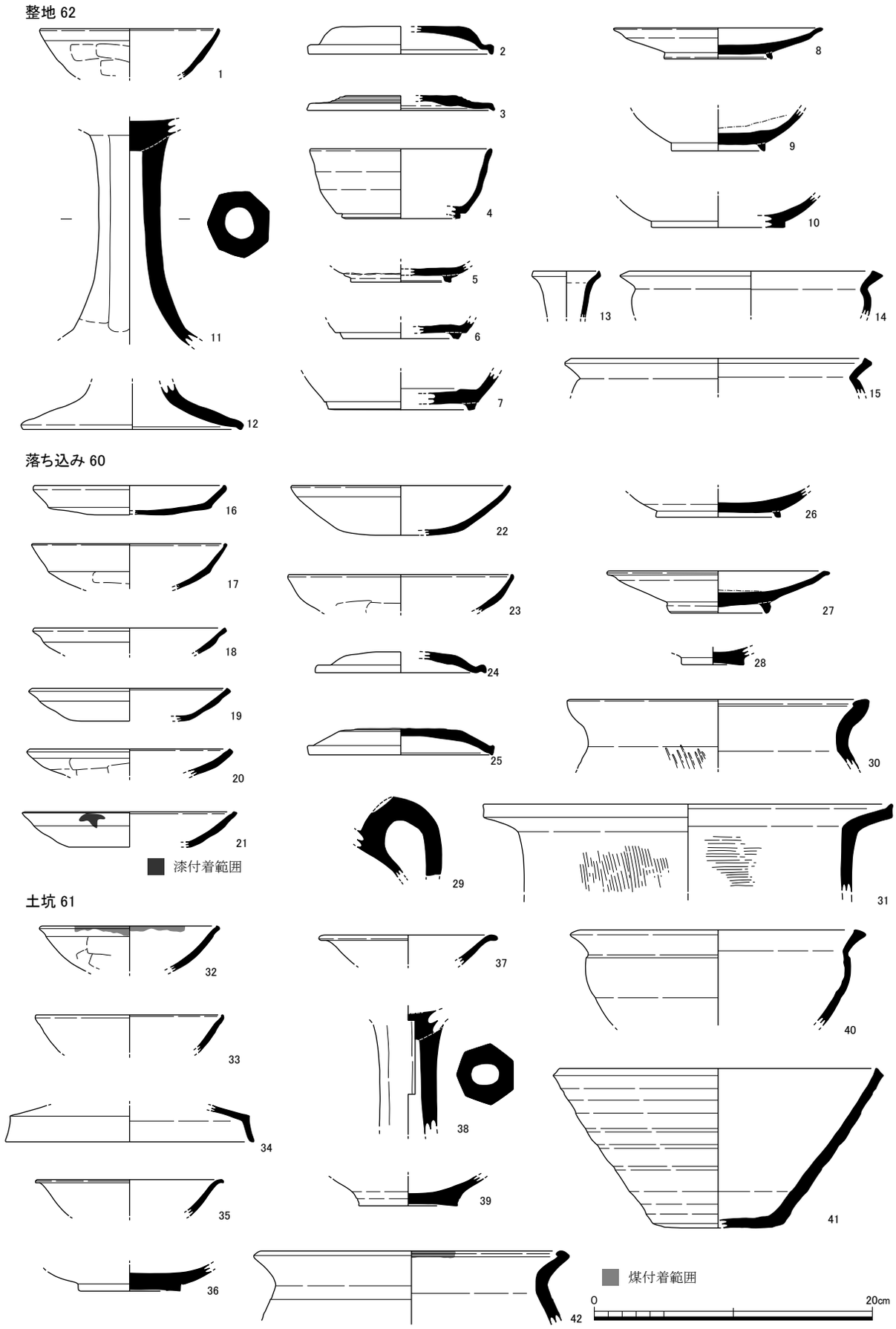


図 18　出土遺物実測図１（1:4）

23.0cmを測る。外面はケズリ調整である。出土した土師器坏は京都Ⅰ期新段階である。

柱穴13（図19） 44は須恵器の杯身である。口径は20.2cmを測る。

土坑74（図19） 45・46は後世の遺構に混入した緑釉陶器である。45の皿は見込みにヘラによる陰刻草花紋を施す。高台は削り出しである。46の碗は貼り付けの輪高台で、底部に糸切痕が残る。

b．平安時代中期～後期

整地（図19） 池64・65の岸を成形するための造成土から出土した。47は黒色土器の皿、48は碗である。47は内外面黒色、48は内面と口縁部外面のみ。ミガキ調整を丁寧に施す。49～51は緑釉陶器の碗である。49は二次的な被熱によって表面が剥離し器面が荒れる。52は須恵器の鉢である。口径は34.0cmを測る。

池64・65（図19） 53～59は砂層、60・61は砂層上面に堆積していた泥砂層から出土した。53～56は土師器皿である。53・54は皿Ａで口径9.4cmと11.4cmを測る。55・56は皿Ｎで口径は13.4cmと14.0cmである。57は灰釉陶器の碗である。断面三角形の高台を貼り付ける。58は緑釉陶器の碗である。高台を削り出す。59は土師器の高坏である。脚部を７面に面取りする。60は土師器の皿Ｎである。体部外面を二段ナデし、口唇部は丸くおさめる。口径は19.0cmである。61は皿Ｎの小皿である。口径は8.2ｃｍを測る。出土した土師器皿は、京都Ⅳ期古段階～中段階である。

溝21（図19） 62・63は土師器皿Ａで、口径は11.0～11.2cmである。64は黒色土器の碗である。内面と口縁部外面を黒色化する。口縁部内面にわずかに段がある。65・66は灰釉陶器の碗である。出土した土師器皿は、京都Ⅲ期中段階～新段階である。

c．室町時代

土坑14（図19） 67・68は土師器皿Ｓで、口径は15.6～17.4cmである。出土した土師器皿は、京都Ⅸ期新段階～Ｘ期古段階である。

土坑18（図19） 69は焼締陶器の擂鉢である。常滑産で15世紀代である。

調査区東側整地層（図19） 70・71は皿Ｓで、口径は14.2～15.2cmである。出土した土師器皿は、京都Ⅸ期中段階である。

d．江戸時代

土坑３（図19） 72・73は焼塩壷である。72は蓋で、天井に「なん者（ば）ん七度本やき志（し）不（ほ）」とスタンプを押す。73は身で器壁が厚く体部は丸味を帯びる。72と73はセットである。74は土師器の焙烙鍋である。口径は30.2cmを測る。17世紀後半から18世紀初頭である。

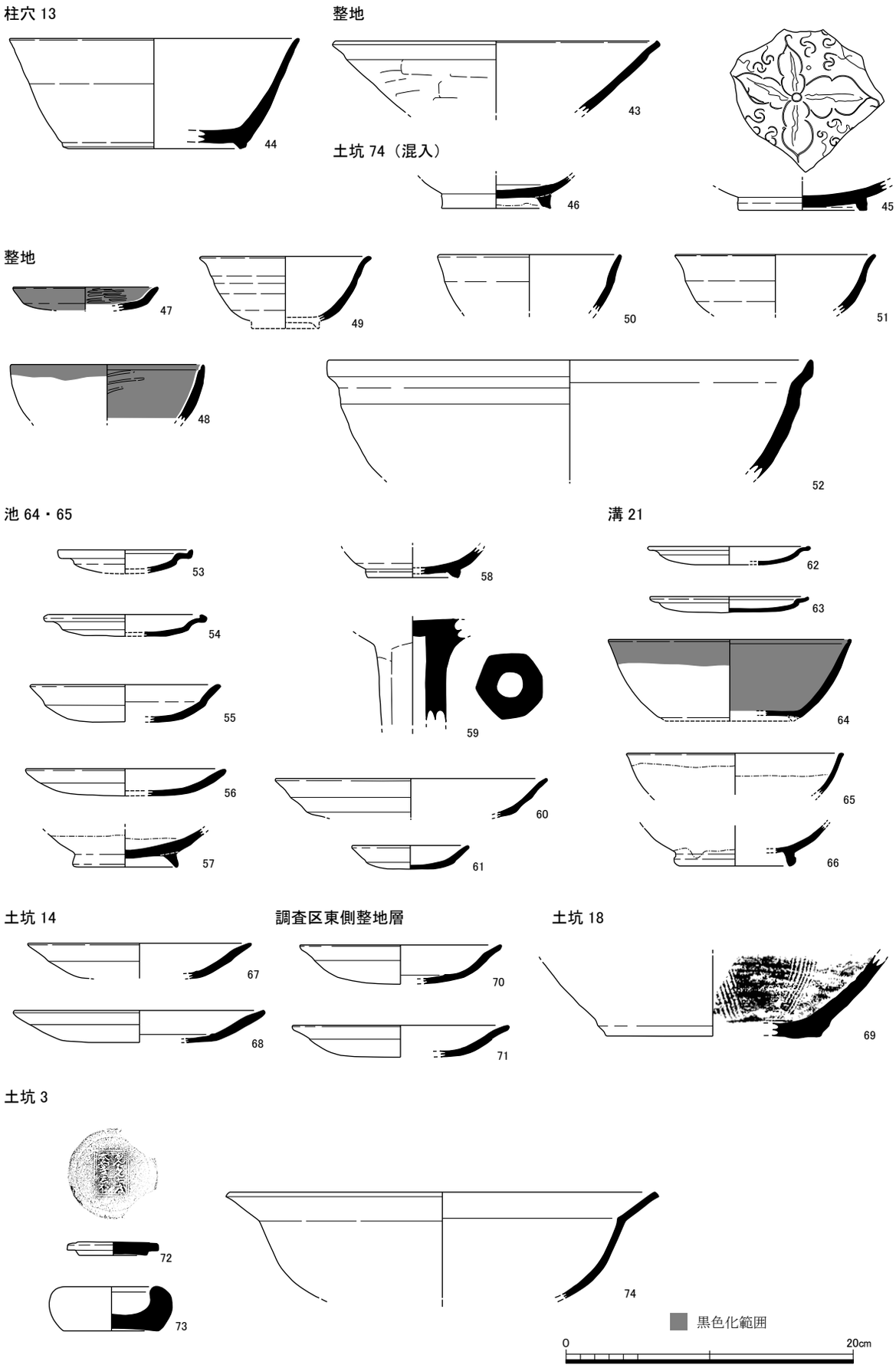


図 19　出土遺物実測図２（1:4）

（２）瓦（図 18）

瓦１は軒丸瓦である。全体に磨滅が著しい。瓦当は複弁蓮華文である。瓦２は複弁五葉蓮華文軒丸瓦である。復元瓦当径は11.0cmである。瓦１・２は落ち込み60から出土した。

瓦３は複弁七葉蓮華文軒丸瓦である。復元瓦当径は14.0cmである。池65の灰黄褐色泥砂層から出土した。瓦４は単弁六葉蓮華文軒丸瓦である。土坑66から出土した。

瓦５～10は唐草文軒平瓦である。瓦５は范が平坦面の大きさとずれていたために上顎と上部の珠文を粘土で補填して成形している。瓦６・７は上部の珠文が表現されていない。瓦９の下顎部に「十」の刻印がある。瓦５～８は土坑66から、瓦９・10は池65褐色泥砂層から出土した。

瓦１・２は平安時代前期、瓦３～10は平安時代中期である。

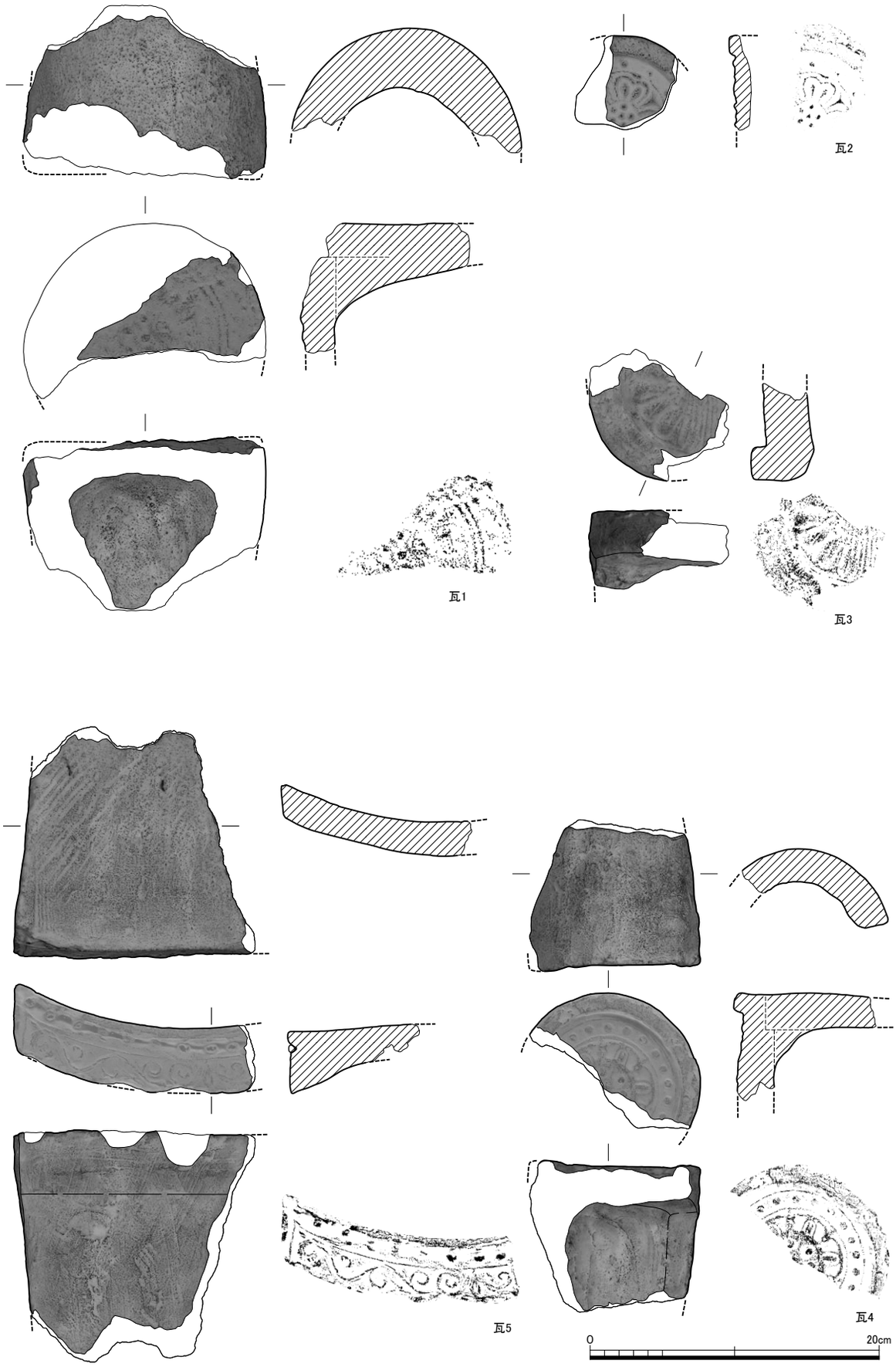


図 20　出土瓦拓影・実測図 1 （1:4）

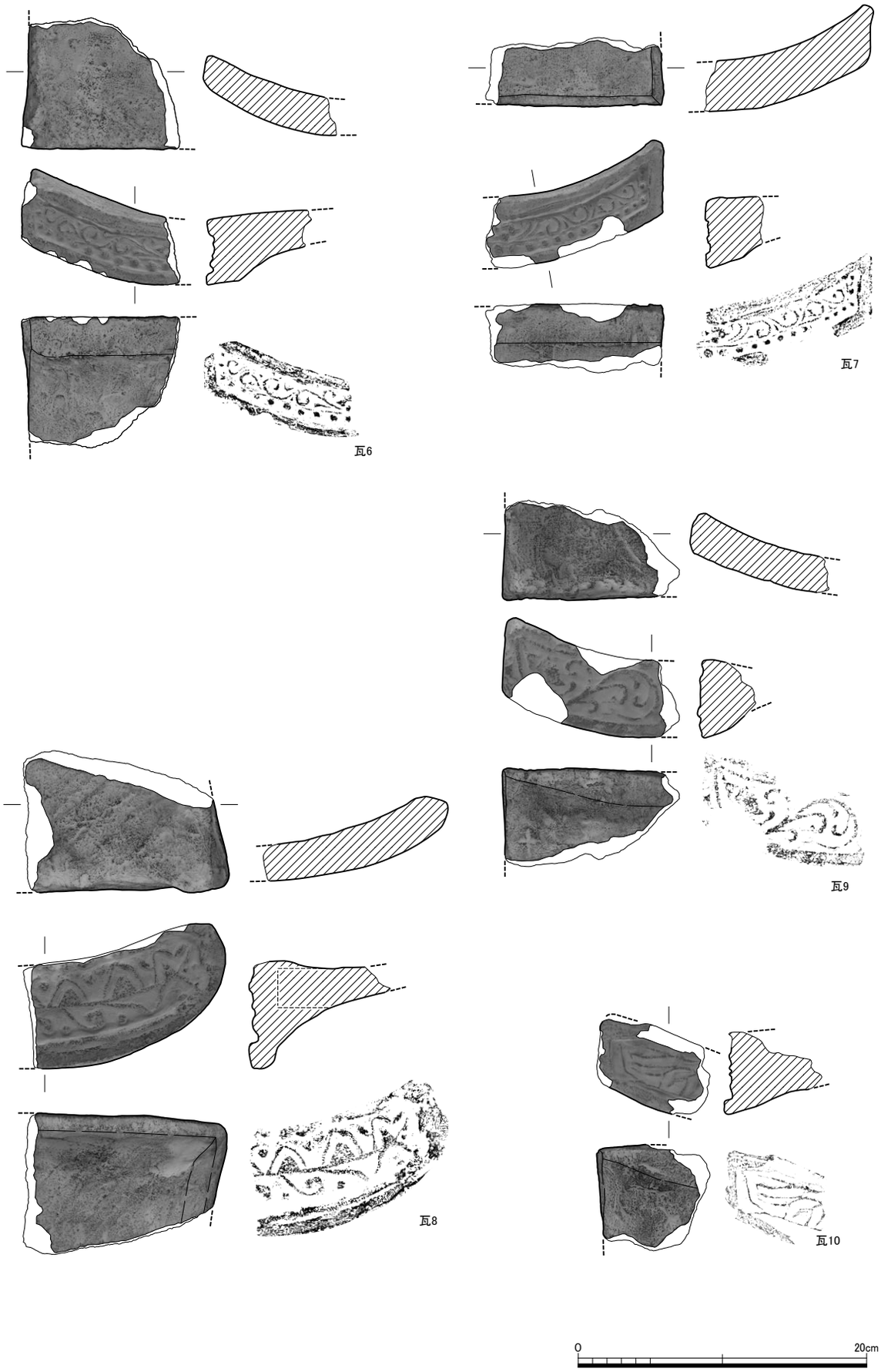


図 21　出土瓦拓影・実測図２（1:4）

５．まとめ

改めて今回の調査地である左京二条二坊十町の邸宅の変遷を顧みると以下の通りである。

平安時代前期に桓武天皇皇子の賀陽親王（794-871）の邸宅で、二条二坊九町の方一町規模であったが、後に十町を取りこみ南北二町になった（『拾芥抄』）。延喜５（902）年にこの土地の建物は焼失とあるが、その当時の家主は不明である（『扶桑略記』）。該当する編年範囲は京都Ⅰ期古段階～Ⅱ期中段階にあたる。

平安時代後期になると関白藤原頼通がこの宅地を入手し、さらに東側の二町を含めて四町の宅地とした。高陽院は当初、通常の寝殿造と異なり寝殿の東西南北に池を配しており、また臣下の邸宅としては初めて正門である西門が楼門となっていた（『栄花物語』）。高陽院は度々罹災し、以下の通り創建時を除き、都合３回の建て直しを行っている。特に第２期高陽院は頼通が公事を放棄してまで自ら指揮監督し、池を大規模に改造したという（『春記』）。

第１期高陽院（藤原頼通邸）

寛仁３（1019）年工事開始。治安元（1021）年完成。長暦３（1039）年放火により焼失。

第２期高陽院（藤原頼通邸、後冷泉天皇里内裏）

長久元（1040）年再建。天喜２（1054）年放火により焼失。

第３期高陽院（藤原頼通邸、後冷泉天皇・後三条天皇・白河天皇里内裏）

康平３（1060）年再建。承暦４（1080）年失火により焼失。

第４期高陽院（藤原師実・師通・忠実邸、堀河天皇・鳥羽天皇里内裏）

寛治６（1092）年再建。天永３（1112）年失火により焼失。

第５期高陽院（後鳥羽上皇御所、森貞親王御所）

元久２（1205）年、東半分の２町（十五町、十六町）に縮小して再建。西側２町（九町、十町）は民地として払い下げられたとされる。貞応２（1223）年放火により焼失。

以上の第１期から第５期までの変遷があるが、第５期は今回の調査地には含まれない。第１・２期は絢爛豪華を極めた関白頼通の私邸時代、第３・４期は里内裏として使用することも考慮して造作された時代である。第１期から第４期までの年代に該当する編年範囲に当てはめると、第１期が京都Ⅲ期新～Ⅳ期古段階、第２期が京都Ⅳ期中段階、第３期が京都Ⅳ期中～新段階、第４期が京都Ⅴ期古段階となる。ちなみに第５期は京都Ⅵ期中段階にあたる。

今回の調査では主な成果が二つ挙げられる。一つは調査区東側で平安時代後期の池西岸部分を検出したこと、もう一つは調査区西側で平安時代前期の遺構を検出したことである。

また、平安時代よりも古い時代の遺物は弥生土器片が黄褐色シルト層上面で出土した。なおこの黄褐色シルトの地山はいわゆる「聚楽土」と呼ばれるもので、陶土や壁土として重宝されたもので江戸時代に特に多く利用された。調査区内で江戸時代の土坑を概観するとこの黄褐色シルト層の部分とほぼ一致するため、江戸時代の土取り穴と考えられる。

１．賀陽親王邸宅跡

平安時代前期の遺構として、整地62（京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階）と土坑61や落ち込み60などの遺構があげられる。整地62は、最大厚0.30ｍの黄灰色シルト整地層で、調査区内で北側が厚く、南側にかけて0.05ｍと薄くなっている。整地の傾斜に沿って深さ0.10ｍの窪地が西側にかけて約５ｍ広がっていた（落ち込み60）。堆積土は滞水性のある黄灰色シルトであることからこれらは池遺構の一部である可能性も考えられる。なお上記のシルト層からは平安時代前期の遺物（京都Ⅱ期）とともに微細な炭片が多く含まれており、被熱した凝灰岩片も出土した。延喜５（902）年にこの地の邸宅が焼失したという記録に関係があるかもしれない。

また落ち込み60の西端と重複せずに隣接して、溝50がさらに西側に存在する。遺物がほとんど出土していないため時期は不明であるが、平安時代中期段階と考えられる整地層の下で検出したため、平安時代前期にさかのぼる可能性も考えられる。条坊の境界から推察して内溝の可能性が考えられるが、築地芯から落込みの中心まで約８ｍ離れているため不明確である。

調査地である左京二条二坊十町と北側の左京二条二坊九町が賀陽親王の邸宅と比定されており、九町の調査[1]では平安時代前期の池の西岸が検出されている。護岸には川原石が使用されており、九町の宅地の東南部にのみ痕跡があり大きく広がらない可能性が指摘されている[2]。今回検出した落ち込み60や整地62では川原石などはほとんど検出していないことから九町で検出された池遺構と同一の池が南に広がっていると安易に想定することはできないが、堀川への導水施設の可能性は考えられる。ただし西側の整地面と落込みの高低差は0.10ｍ程度しかないため、流量は少ないといえる（図22）。

なお頼通が高陽院の土地を手に入れる前段階の10世紀に方一町邸宅が九町跡にあったとされるが[3]、今回の十町跡では溝21が該当する可能性がある。

２．高陽院園池跡

今回の調査結果は、近隣での調査[4]に概ね該当する内容となった。州浜を黄灰色中砂と拳大の川原石で整地された池の西岸は、南東方向にゆるやかに傾斜している状況を確認することができた。ただし護岸改修と考えられる造作は明瞭に判断できるものではなかった。段階的な層序の変化は確認できたが、当初の池の造作に比較すると石の配置や汀の推定など不明瞭である。当地の高陽院では少なくとも４回の造作があるが、今回の調査では池の造成は２回の痕跡しか見いだせなかった。

池は調査地東側にあった旧河道の自然地形を利用したと考えられる。池64の東端部分で地山である褐色砂礫層が深く傾斜している部分に堆積した灰色粘土は、不均一に堆積して無遺物層であったことから、低湿地の自然堆積層と判断した。ただある程度は掘削成形されたと思われ、州浜を砂で成形する前に0.02ｍ程度のシルト土で造成している。そこへ黄灰色中砂を堆積させ、傾斜に沿うように整地もおこなっている。砂で岸辺を整え、0.05ｍ程度の小礫を護岸として配置し、汀の標高は39.8ｍ程度となり、近隣周辺調査結果とほぼ同一と考えられる。造成土や黄灰色中砂から出土した土器は、京都Ⅳ期古段階～中段階のもので高陽院創建期から第２期の範疇である。

第２段階の池岸は褐色泥砂によるもので、前段階の礫よりもわずかに大きく、拳大の礫を護岸としていると考えられる。礫の集中地点から、汀の位置はほぼ同じと考えられるため、標高が0.03ｍ

程度上がる。東側の傾斜ではさらに不明瞭で池底に礫群が集中している状況であった。堆積土に含まれる遺物は京都Ⅳ期中段階のもので、第２期もしくは第３期高陽院の段階と推定される。その上位の堆積土には鎌倉時代の遺物がわずかに含まれることから第５期高陽院において、当地が廃絶された時の堆積土の可能性が考えられる。さらにその上位の堆積土は中世遺物が含まれており、京都Ⅸ期中段階以降の痕跡が認められる。ただし明確な遺構は土坑など数基しかなく、遺物もわずかである。

注釈

1　網伸也・内田好昭・高正龍1993「平安京左京二条二坊・高陽院１」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所（図８調査３）

2　網伸也1997「平安京左京二条二坊・高陽院」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

3　網伸也1999「発掘調査からみた頼通伝領前の高陽院」『研究紀要』第５号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所

4　網伸也1994「平安京左京二条二坊・高陽院」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所（図８調査５）、平尾政幸2005『平安京左京二条二坊十町（高陽院）跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所（図８調査８）

参考文献

1　太田静六2010『寝殿造の研究』吉川弘文館

2　西山良平2012「序章　平安京と貴族の住まいの論点」『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会

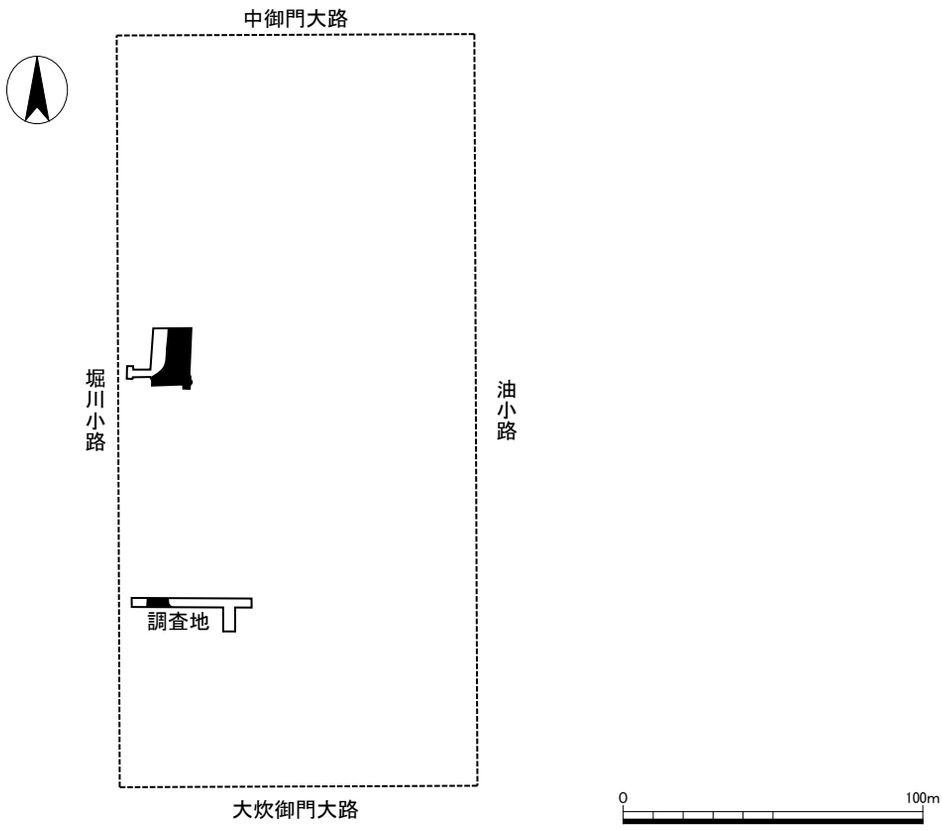


図 22　平安時代前期の邸宅（賀陽親王邸）推定図（1:2,500）

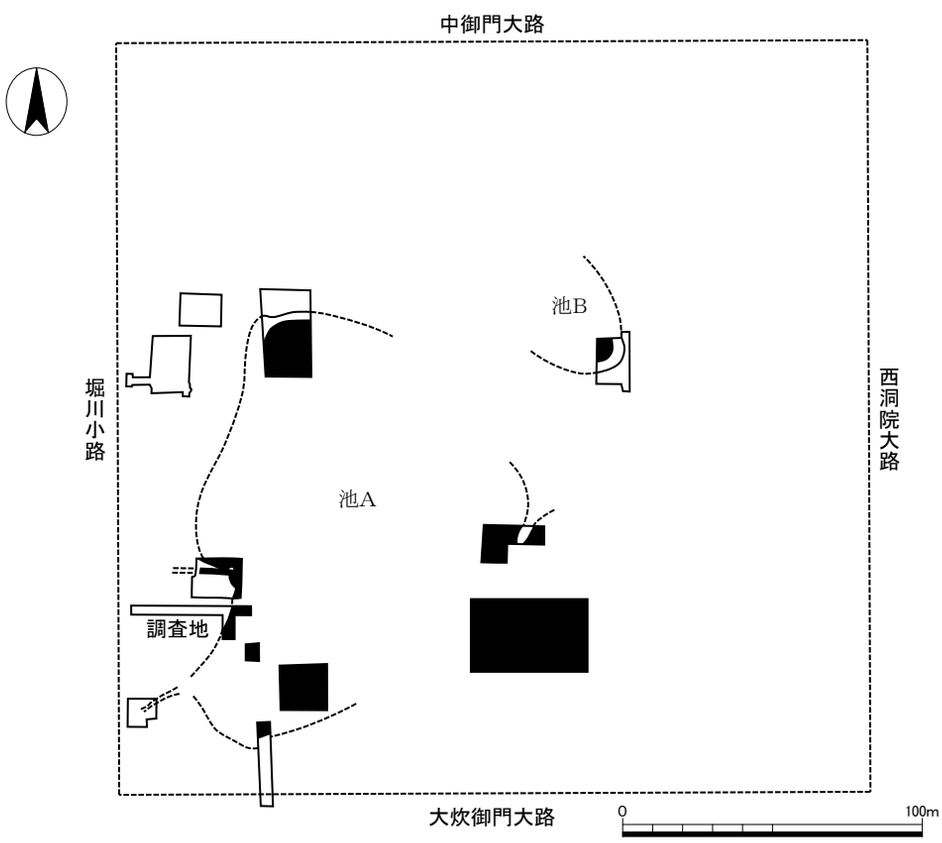


図 23　平安時代中期～後期の高陽院池推定図（1:2,500）

表４　出土遺物観察表

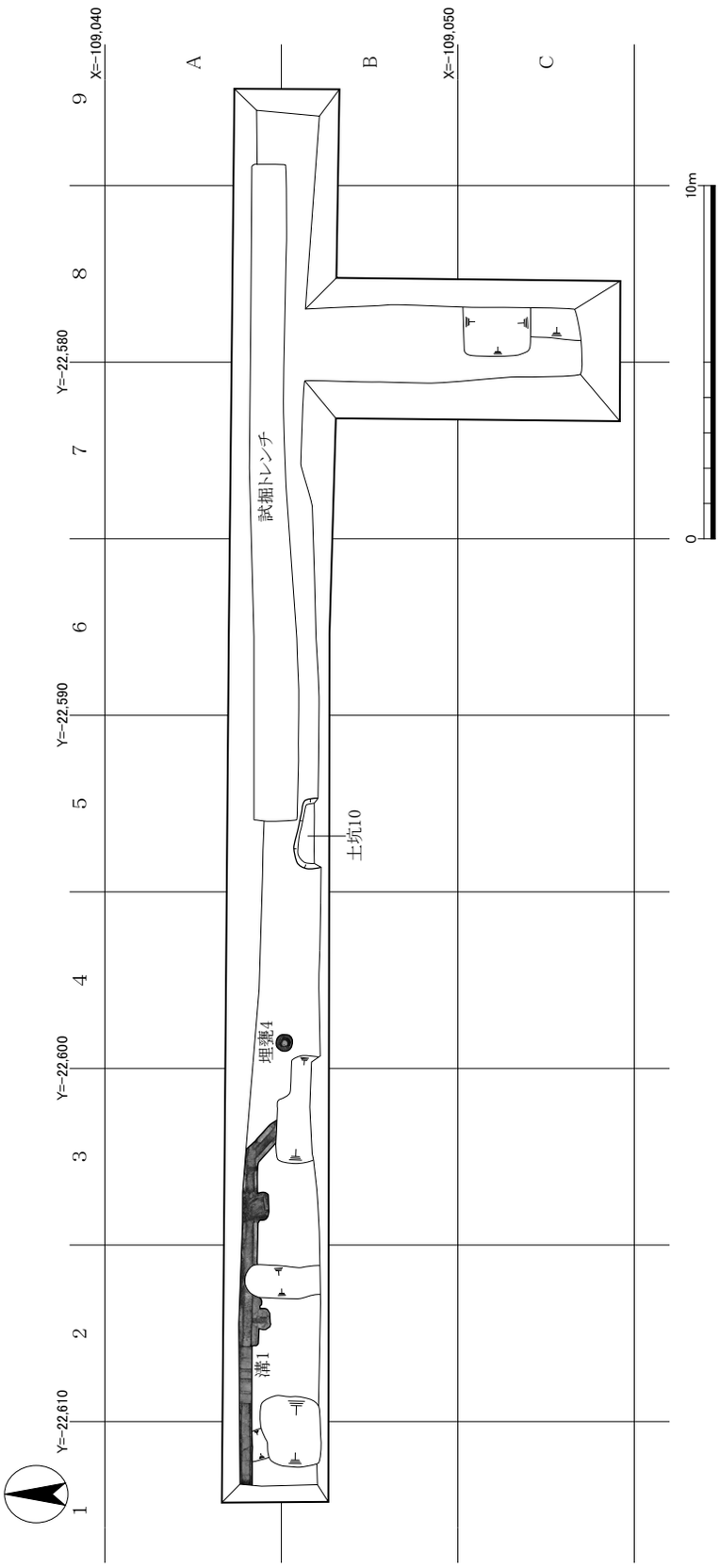
遺物番号	遺構	種類	器種	法量			調整技法	焼成胎土	色調	備考	時代
				口径	器高	底径					
1	整地62	土師器	碗	13.2	(3.5)	—	外：ケズリ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	橙色		平安前期
2	整地62	須恵器	蓋	13.4	2.0	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
3	整地62	須恵器	蓋	13.4	1.1	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
4	整地62	須恵器	杯Ｂ	13.2	5.0	8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
5	整地62	須恵器	杯Ｂ	—	(1.3)	7.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
6	整地62	須恵器	杯Ｂ	—	(1.3)	8.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
7	整地62	須恵器	壷	—	(2.5)	9.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
8	整地62	灰釉陶器	皿	15.0	2.2	7.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰色 釉：薄緑色		平安前期
9	整地62	灰釉陶器	碗	—	(3.0)	6.7	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰色 釉：薄緑色		平安前期
10	整地62	緑釉陶器	碗	—	(2.3)	9.6	外：ケズリ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：緑	平高台。山城産。	平安前期
11	整地62	土師器	高坏	—	(16.0)	—	外：ケズリ、ナデ 内：不調整	良好 密	橙色		平安前期
12	整地62	土師器	高坏	—	(3.3)	16.0	外：磨滅 内：ナデ	良好 密	橙色		平安前期
13	整地62	須恵器	瓶	4.8	(3.4)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
14	整地62	須恵器	鉢	19.0	(3.2)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
15	整地62	須恵器	鉢	22.0	(2.5)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	軟質 密	灰白色		平安前期
16	落ち込み60 （土坑45）	土師器	杯	14.0	2.1	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	黄橙色		平安前期
17	落ち込み60 （柱穴30）	土師器	杯	14.0	(3.2)	—	外：ケズリ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	黄橙色		平安前期
18	落ち込み60	土師器	杯	14.0	(1.8)	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	橙色		平安前期
19	落ち込み60	土師器	杯	14.5	2.2	8.2	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	橙色		平安前期
20	落ち込み60	土師器	杯	14.8	(1.8)	—	外：ケズリ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	橙色		平安前期
21	落ち込み60	土師器	杯	15.4	2.5	9.0	外：磨滅 内：ナデ	良好 密	黄橙色	外面に漆状被膜付着	平安前期
22	落ち込み60	土師器	杯	15.6	3.7	—	外：磨滅 内：ナデ	軟質 密	明黄橙色		平安前期
23	落ち込み60	土師器	杯	16.4	(2.6)	—	外：ケズリ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	橙色		平安前期
24	落ち込み60	須恵器	蓋	12.2	1.5	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
25	落ち込み60	須恵器	蓋	13.2	2.0	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
26	落ち込み60	灰釉陶器	碗	—	(1.7)	9.0	外：ナデ 内：横ハケ、ナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：薄緑色	底部ヘラ切り。貼り付け高台。K14-2	平安前期
27	落ち込み60 （柱穴30）	灰釉陶器	皿	16.0	2.0	6.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：薄緑	底部ヘラ切り。三日月高台貼り付け。重ね焼き痕。	平安前期
28	落ち込み60	緑釉陶器	碗	—	(1.5)	4.4	外：磨滅 内：ロクロナデ	軟質 密	胎土：黄褐色 釉：緑		平安前期
29	落ち込み60	灰釉陶器か	水注	—	(5.7)	—	ケズリ	堅致 密	青灰色	水注の取手部か。	平安前期
30	落ち込み60	土師器	甕	21.6	(5.0)	—	外：タタキ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	良好 粗	にぶい黄橙色		平安前期
31	落ち込み60	土師器	甕	29.7	(6.4)	—	外：タテハケ、横ナデ 内：横ナデ、横ハケ	良好 粗	黄褐色		平安前期
32	土坑61	土師器	杯	12.6	(3.2)	—	外：ケズリ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	黄橙色	内外面煤付着。	平安前期
33	土坑61	土師器	杯	13.6	(2.8)	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	黄橙色		平安前期
34	土坑61	灰釉陶器	蓋	18.0	(2.6)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	軟質 密	胎土：灰白色 釉：薄緑色		平安前期
35	土坑61	緑釉陶器	碗	13.2	(2.5)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：薄緑		平安前期
36	土坑61	緑釉陶器	碗	—	(1.9)	7.2	外：ケズリ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：薄緑色	蛇の目高台。	平安前期
37	土坑61	緑釉陶器	皿	12.8	(2.1)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：浅黄橙色 釉：薄緑		平安前期
38	土坑61	土師器	高坏	—	(8.9)	—	外：ケズリ 内：ナデ	良好 密	黄橙色	脚部７面。脚部径4.3cm。	平安前期
39	土坑61	灰釉陶器	鉢	—	(2.2)	7.1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	灰白色		平安前期
40	土坑61	須恵器	鉢	21.2	(6.9)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	軟質 密	灰白色		平安前期
41	土坑61	須恵器	鉢	23.8	11.5	9.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	軟質 密	青灰色		平安前期
42	土坑61	土師器	甕	21.4	(5.3)	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 粗	橙色	口縁端部内面に煤付着	平安前期

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			調整技法	焼成胎土	色調	備考	時代
				口径	器高	底径					
43	整地 (A2暗褐色砂礫)	土師器	杯	23.0	(5.0)	—	外：ケズリ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	黄橙色	高台付きか。	平安前期
44	柱穴13	須恵器	杯Ｂ	20.2	7.6	12.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	青灰色		平安前期
45	土坑74 (混入)	緑釉陶器	皿	—	(2.0)	8.8	外：ケズリ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：淡緑色	見込みに陰刻花紋	平安前期
46	土坑74 (混入)	緑釉陶器	碗	—	(2.3)	7.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰黄橙色 釉：深緑	底部糸切。貼り付け高台。	平安中期
47	整地 (Ａ８赤褐色)	黒色土器	皿	10.2	1.8	—	外：ミガキ 内：ミガキ	良好 密	黒色	黒色土器Ｂ	平安中期
48	整地 (Ａ８赤褐色)	黒色土器	碗	13.4	(4.0)	—	外：ナデ 内：ミガキ	良好 密	黒色、橙色	黒色土器Ａ。	平安中期
49	整地 (Ｃ８赤褐色)	緑釉陶器	碗	12.0	(4.5)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：緑色	被熱で表面が剥離、器面が荒れる。	平安中期
50	整地（AB８ 赤褐色）	緑釉陶器	碗	12.8	(4.0)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良好 密	胎土：灰白色 釉：緑		平安中期
51	整地 (Ｃ８赤褐色)	緑釉陶器	碗	13.8	(4.2)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：緑色		平安中期
52	整地（AB８ 赤褐色）	須恵器	鉢	34.0	(8.2)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良好 密	灰白色		平安中期
53	池65 黄灰色砂層	土師器	皿Ａ	9.4	1.6	—	外：横ナデ、ナデ 内：ナデ	良好 密	明黄橙色		平安中期
54	池64 黄灰色砂層	土師器	皿Ａ	11.4	1.5	—	外：横ナデ、ナデ 内：ナデ	良好 密	明黄橙色		平安中期
55	池64 黄灰色砂層	土師器	皿Ｎ	13.4	2.6	—	外：横ナデ、ナデ 内：ナデ	良好 密	橙色		平安中期
56	池64 黄灰色砂層	土師器	皿Ｎ	14.0	1.9	—	外：横ナデ、ナデ 内：ナデ	良好 密	明黄橙色		平安中期
57	池65 黄灰色砂層	灰釉陶器	碗	—	(2.7)	7.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	明灰色	形骸化した三日月高台。K90-3	平安中期
58	池65 黄灰色砂層	緑釉陶器	碗	—	(2.1)	6.4	外：ケズリ 内：ロクロナデ	堅致 密	灰色	削り出し高台。	平安中期
59	池65 黄灰色砂層	土師器	高坏	—	(7.4)	—	外：ケズリ 内：不調整	良好 密	橙色	脚部７面。脚部径4.8cm。	平安中期
60	池64 褐色泥砂層	土師器	皿Ｎ	19.0	(2.8)	—	外：２段ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	黄橙色		平安中期
61	池65 灰黄褐色 泥砂層	土師器	皿Ｎ	8.2	1.6	—	外：横ナデ、ナデ 内：ナデ	良好 密	黄橙色		平安中期
62	溝21	土師器	皿Ａ	11.2	1.3	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	明黄橙色		平安中期
63	溝21	土師器	皿Ａ	11.0	1.2	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	明黄橙色		平安中期
64	溝21	黒色土器	碗	17.0	(5.5)	—	外：ナデ 内：ミガキ	良好 密	外：橙色、黒色 内：黒色		平安中期
65	溝21	灰釉陶器	碗	15.2	(2.8)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：薄緑色		平安中期
66	溝21	灰釉陶器	碗	—	(2.8)	8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	胎土：灰白色 釉：薄緑色		平安中期
67	土坑14	土師器	皿Ｓ	15.6	(2.5)	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	橙色		室町後期
68	土坑14	土師器	皿Ｓ	17.4	2.2	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	黄橙色		室町後期
69	土坑18	焼締陶器	擂鉢	—	(5.7)	15.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	堅致 密	灰褐色	７条１単位の擂目 常滑産	室町後期
70	調査区東側 整地層	土師器	皿Ｓ	14.2	2.8	—	外：横ナデ、ナデ 内：ナデ	良好 密	橙色		室町後半
71	調査区東側 整地層	土師器	皿Ｓ	15.2	2.2	—	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	良好 密	明黄橙色		室町後半
72	土坑３	土製品	塩壷蓋	4.8	1.0	天井径 6.4	型押し	良好 密	黄褐色	天井に刻印「なん者（ば）ん七度本やき志（し）不（ほ）」	江戸
73	土坑３	土製品	塩壷身	6.2	3.1	6.6	型押し、ミガキ	良好 密	黄褐色		江戸
74	土坑３	土師器	焙烙	30.2	(7.4)	—	外：型押し 内：ナデ	良好 密	黒褐色、灰黄橙色		江戸

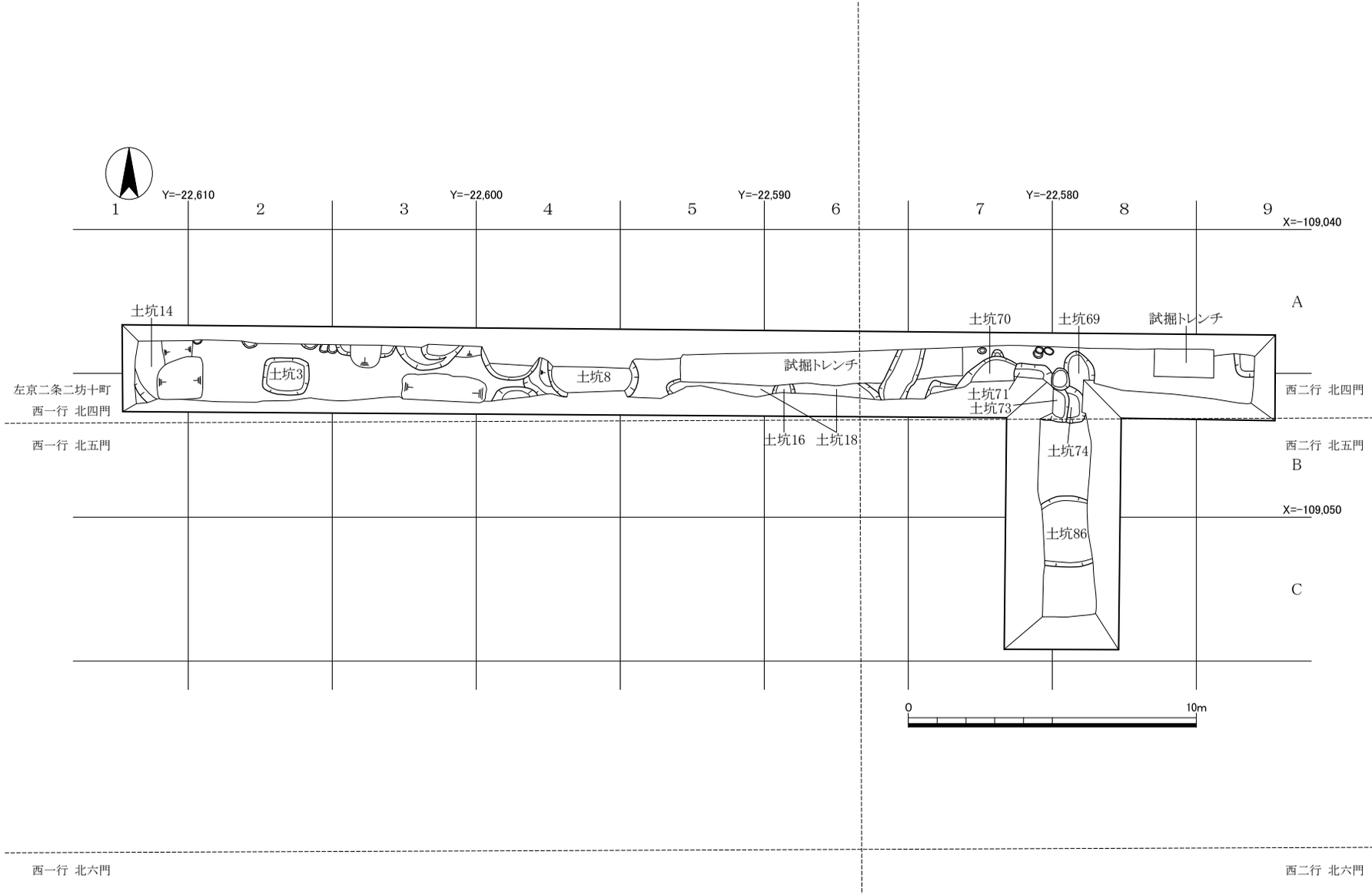
表５　出土瓦観察表

遺物番号	遺構	種類	文様	法量			調整技法	焼成胎土	色調	特徴	時代
				瓦当高（破片）復元長	瓦当幅（破片）復元長	厚さ					
瓦1	落ち込み60	軒丸	複弁蓮華文	(7.5)	(12.9) 16.8	2.5	ナデ	軟質密	灰白色		平安前期
瓦2	落ち込み60	軒丸	複弁蓮華文	(6.4) 11.0	(4.8) 11.0	(1.5)	ナデ	堅緻密	灰白色		平安前期
瓦3	池65 灰黄褐色泥砂	軒丸	複弁蓮華文	(8.2) 14.0	(9.2) 14.0	3.9	ナデ	堅緻密	灰色		平安中期
瓦4	土坑66	軒丸	単弁蓮華文	(6.6) 12.6	12.6	2.8	ナデ	堅緻密	灰色		平安中期
瓦5	土坑66	軒平	唐草文	4.2	(16.6) 27.3	3.5	ナデ	堅緻密	灰色		平安中期
瓦6	土坑66	軒平	唐草文	4.4	(10.9)	3.0	ナデ	堅緻密	灰色		平安中期
瓦7	土坑66	軒平	唐草文	4.7	(12.3)	3.5	ナデ	堅緻密	灰色		平安中期
瓦8	土坑66	軒平	唐草文	7.1	(14.2)	2.0	ナデ	堅緻密	灰色		平安中期
瓦9	池65 褐色泥砂	軒平	唐草文	5.3	(12.2)	3.3	ナデ	堅緻密	灰色	顎部に「十」の刻印	平安中期
瓦10	池65 褐色泥砂	軒平	唐草文	5.6	(7.8)	4.4	ナデ	堅緻密	灰色		平安中期

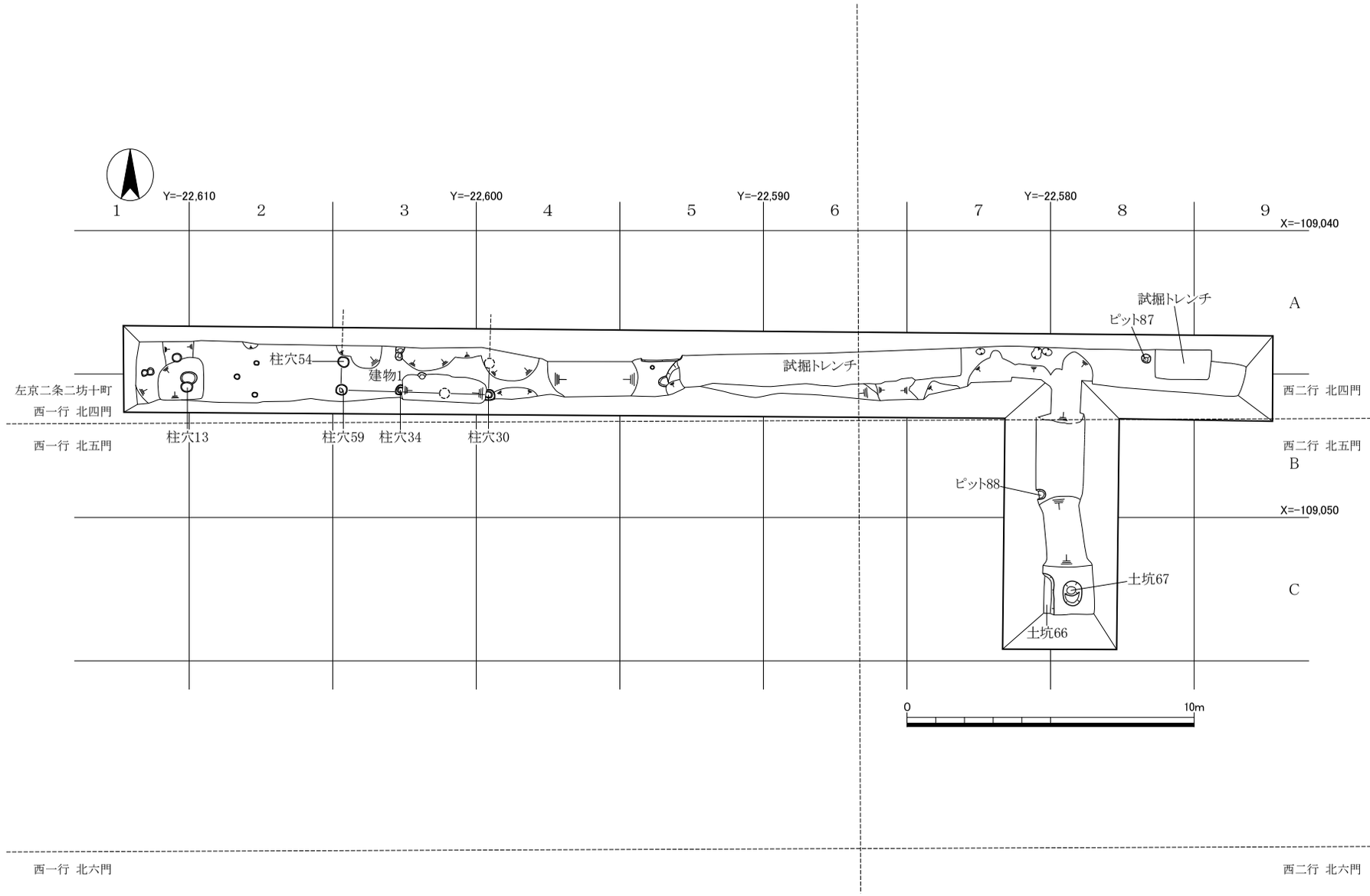
図　　版



第１面平面図［江戸時代後半］（1：200）



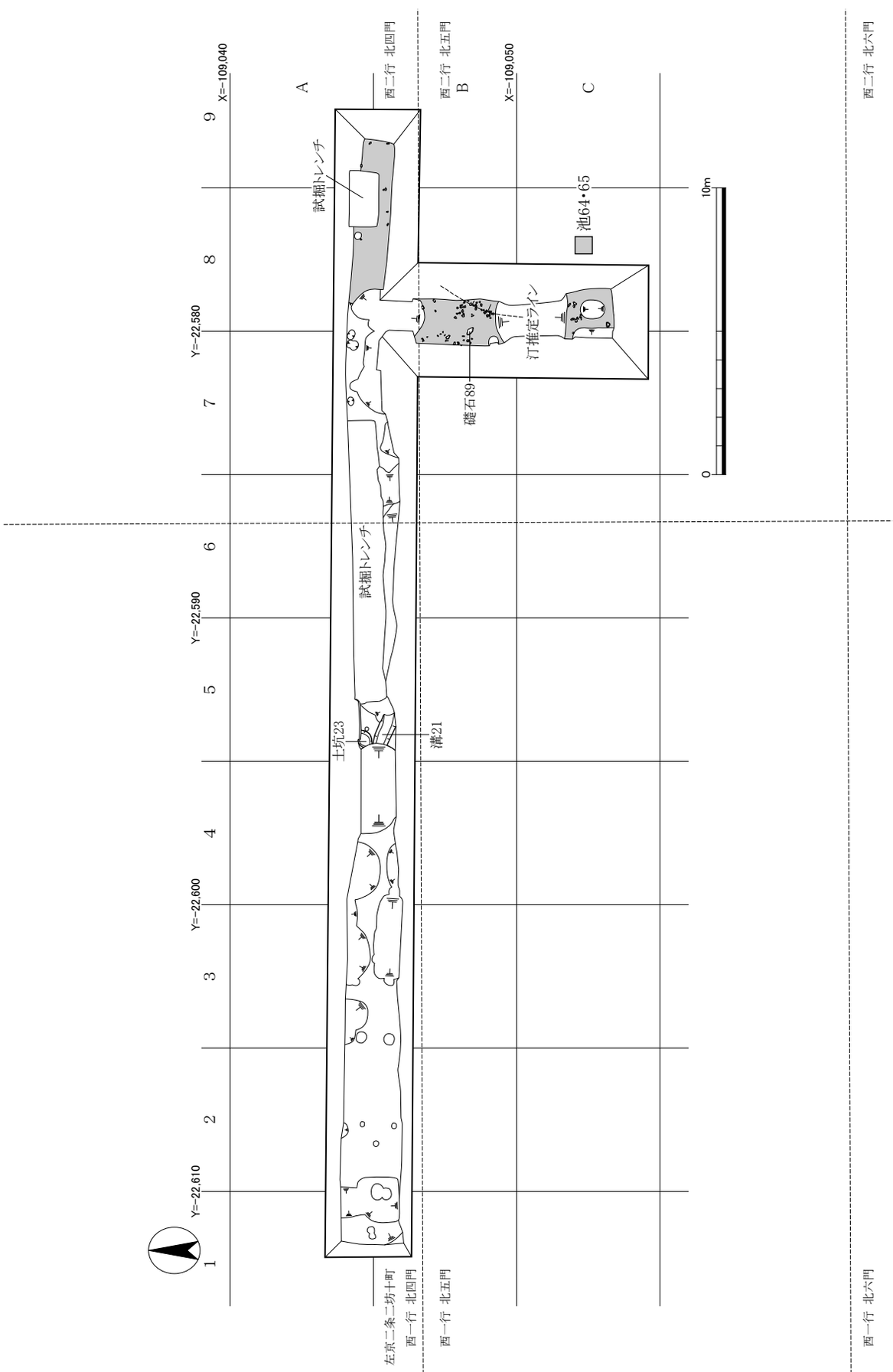
第2面平面図［室町時代～江戸時代中頃］（1：200）



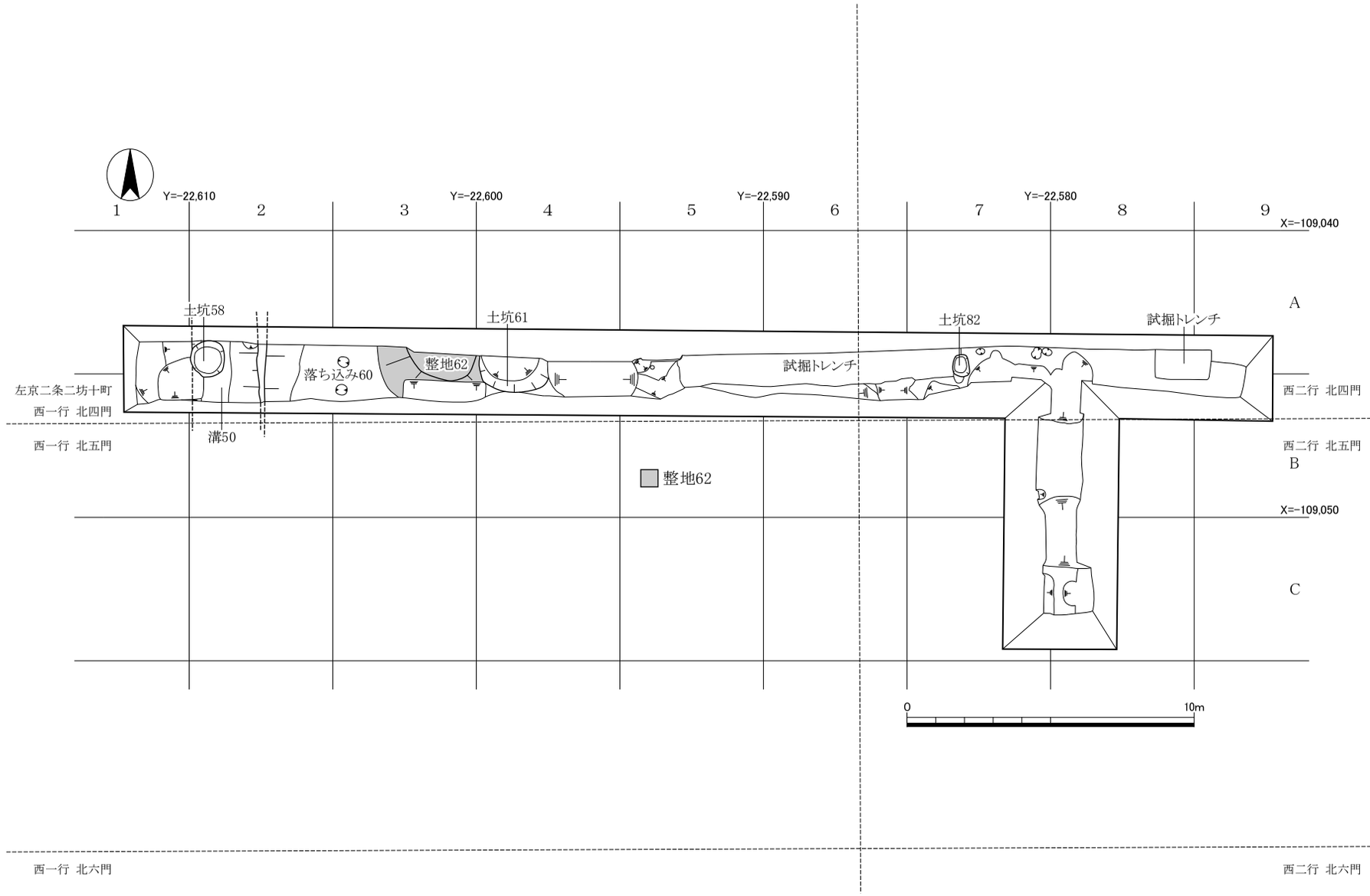
第３面平面図［鎌倉時代以降］（1：200）

図版３

版図4



第４面平面図［平安時代中期～後期］（1：200）



第５面平面図［平安時代前期以前］（1：200）

図版５

第１面　調査区西半全景（東から）

溝１（東から）

第２面　調査区西半全景（東から）

建物１　（北西から）

第３面　調査区西半全景　（東から）

整地 62・落込み 60　（南東から）

溝 50（北東から）

調査区東半全景　（西から）

池 65 上層　（北西から）

池 64 上層　（北西から）

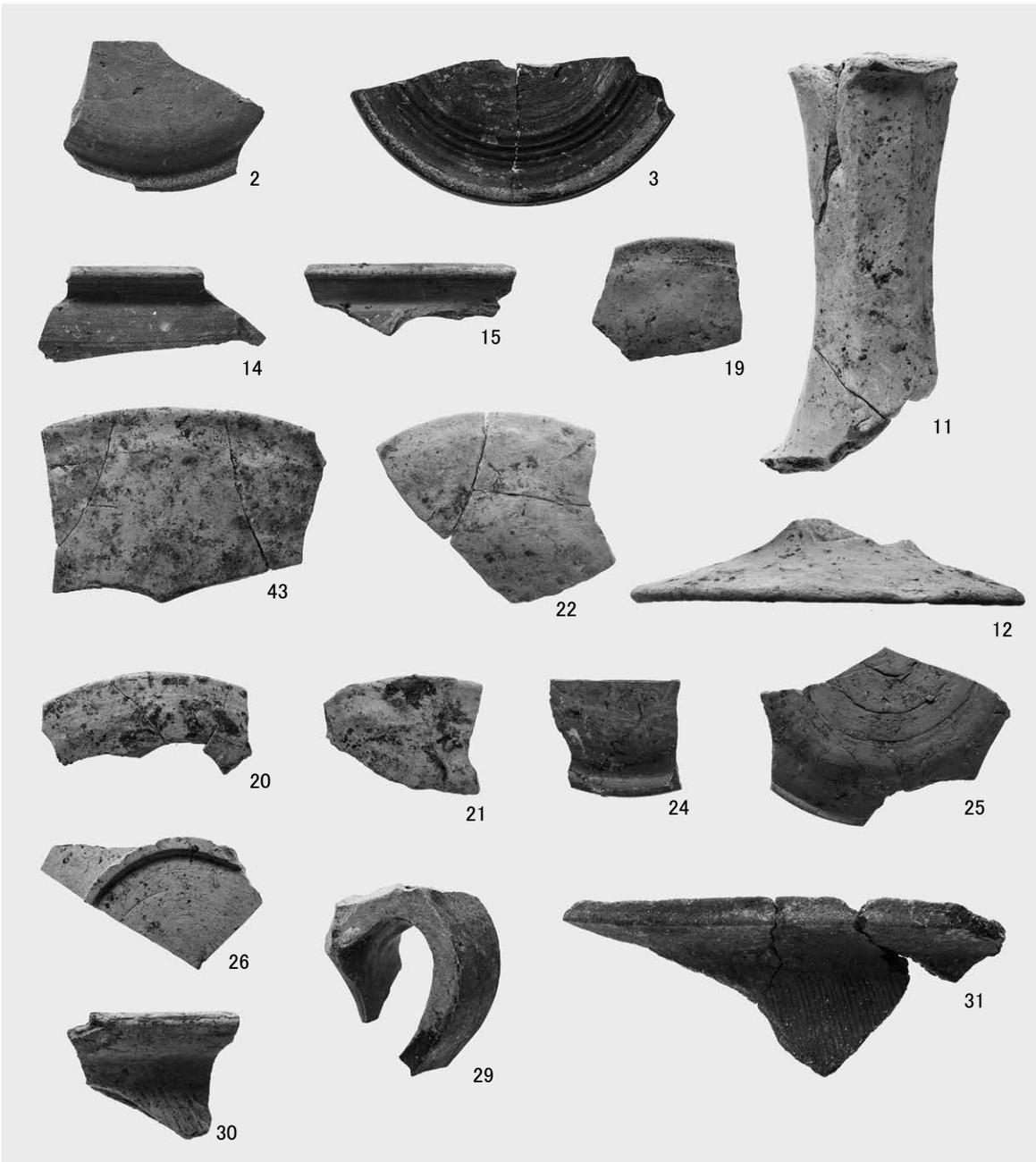
池 64・65 下層　（北西から）

池 65 下層　（北から）

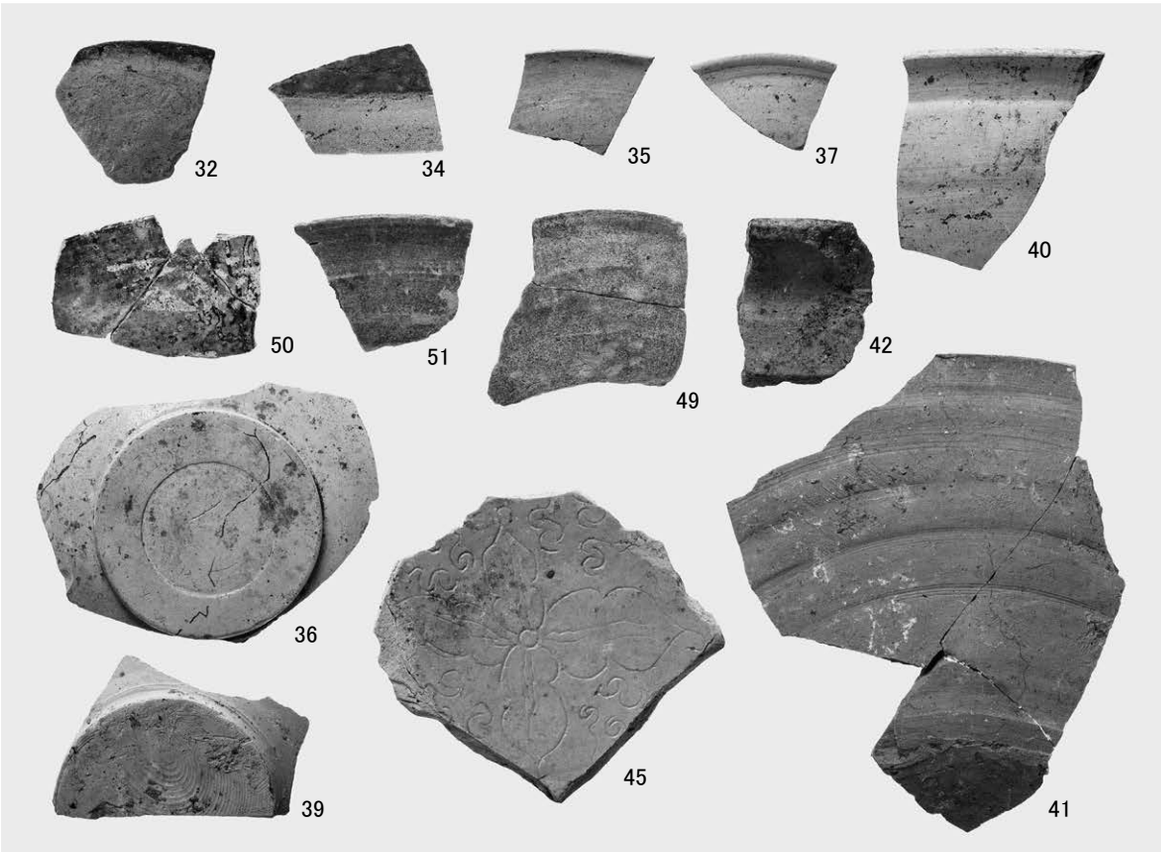
池 64 下層　（北西から）

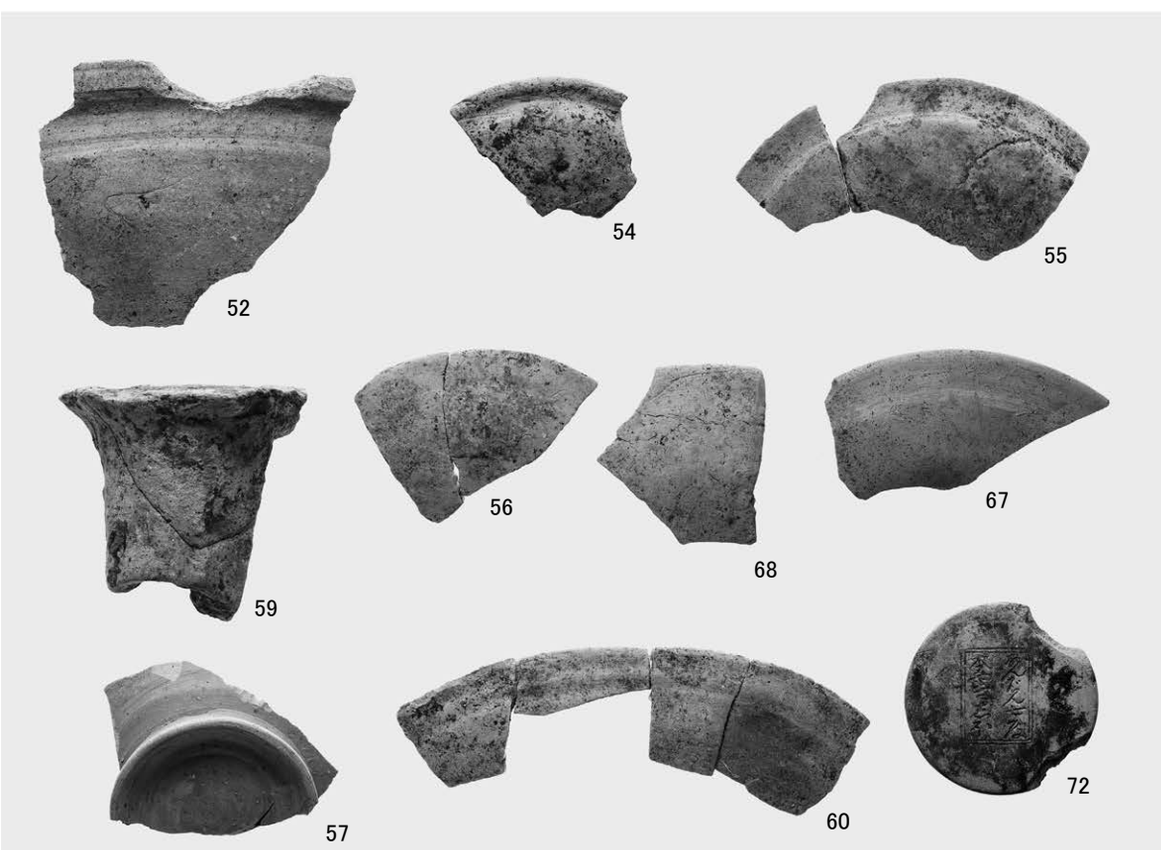
池 65 下層　構築土除去後　（北から）

池 64 下層　構築土除去後　（北東から）

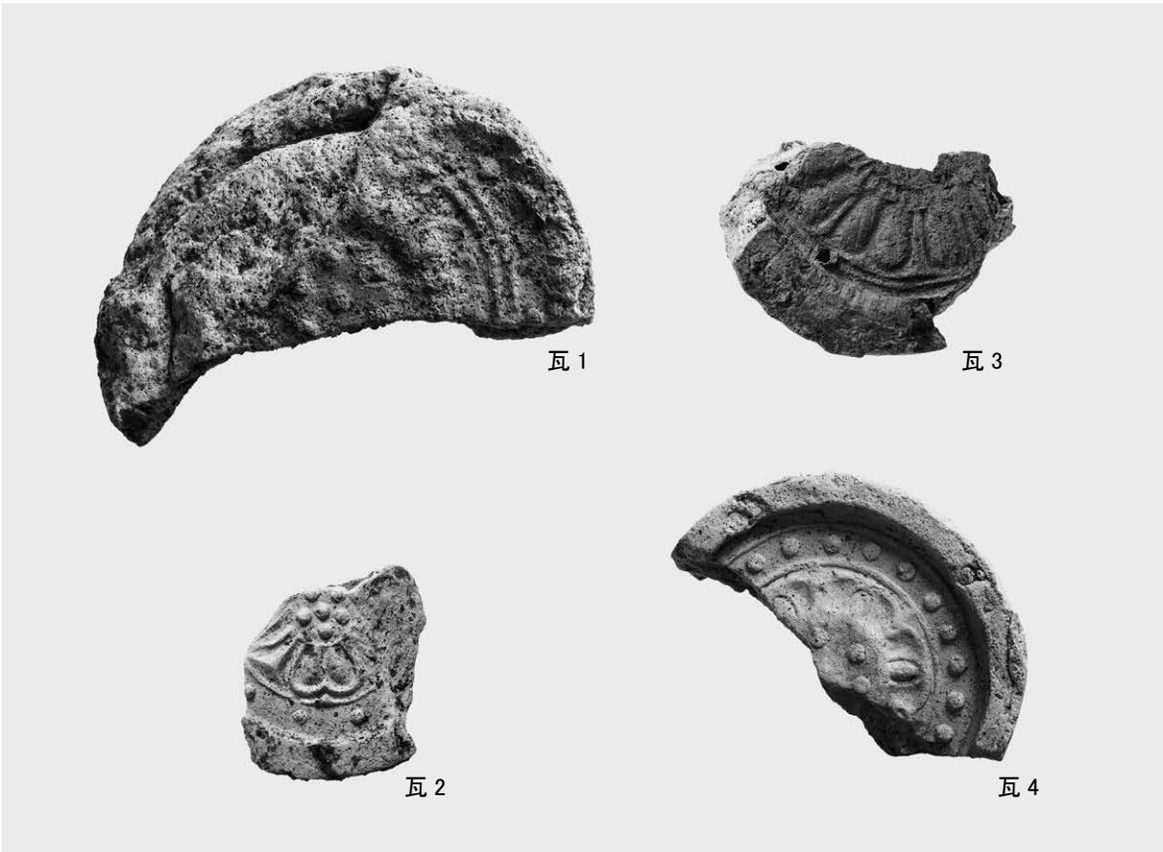


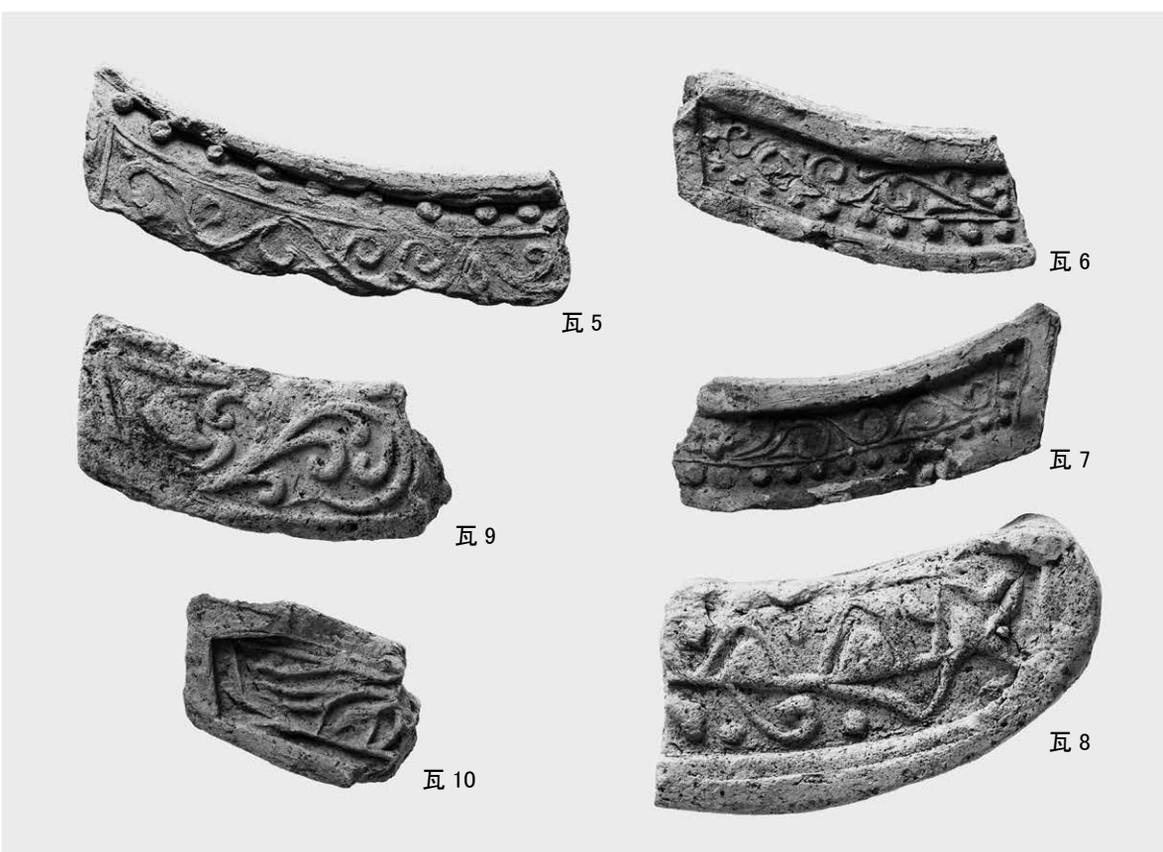
出土遺物１





出土遺物２





出土瓦

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいあんきょうさきょうにじょうにぼうじゅっちょうあと・かやのいんあと・にじょうじょうきたいせき
書　　名	平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡
シリーズ名	アルケス発掘調査報告
シリーズ番号	3
編著者名	持田　透
編集機関	合同会社アルケス
所在地	京都市山科区西野山中臣町75番地6
発行所	合同会社アルケス
発行年月日	西暦2020年2月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京（へいあんきょう） 左京二条二坊（さきょうにじょうにぼう） 十町跡・高陽院（じゅっちょうあと・かやのいん） 跡・二条城北遺（あと・にじょうじょうきたいせき） 跡	京都市中京区（きょうとしなかぎょうく） 東堀川丸太町（ひがしほりかわまるたまち） 下ル七丁目町（さがるななちょうめちょう） 5、6-1	26100	1 248 238	35度 1分 1秒	135度 45分 9秒	2018年8月27日～2018年10月19日	152㎡	ホテル建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二条城北遺跡（にじょうじょうきたいせき）	集落跡	弥生時代		土師器	平安時代後期の高陽院に関係する池護岸を検出した。また平安時代前期の苑池と考えられる遺構を検出した。 江戸時代の粘土採掘坑を複数検出した。
高陽院跡（かやのいんあと）	邸宅跡	平安時代	池	土師器	
平安京（へいあんきょう） 左京二条二坊（さきょうにじょうにぼう） 十町跡（じゅっちょうあと）	都城跡	平安時代前期	苑池遺構・溝・土坑	土師器、陶器、磁器、瓦	
		平安時代中期	溝	土師器、陶器	
		江戸時代	粘土採掘坑・溝	土師器、陶器、磁器、瓦	

アルケス発掘調査報告　３

平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡

発行日　2020年2月29日

編　集
発　行　合同会社　アルケス

住　所　京都市山科区西野山中臣町75番地６
〒607-8305　℡ 075-582-5172

印　刷　佐川印刷株式会社